

平成22年度 後期（第9期）研究教員

研究報告集録

第 9 号

はじめに

<生徒指導>

地域・関係機関と連携した

「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援のあり方
～開発的生徒指導の視点での支援の工夫～

宮古島市立北中学校
狩俣 典昭

平成23年3月

宮古島市立教育研究所

はじめに

平成 23 年を迎えて早二月。時の経つのは速いもので後期の研究期間も残り少なくなりました。

学校現場では、今学年度のまとめと新学年度の教育計画策定でわずかな時間も惜しまれる状況だと思います。また、新学習指導要領の完全実施に向けて、宮古教育事務所や宮古島市教育委員会の指導の下、授業研究会や講演等、意欲的な指導改善のプログラムが実践されてきました。新しい教育課程の実施に向けて、教師一人一人の意識の高まりと授業実践力の向上が大いに望まれるところです。

ただ、どんな時にも新しい教育の波が起こるとき、それが単に社会の時流に流されているだけの改革であってはならないと考えます。教育について考える時、それは「子供一人一人の幸福」の実現のためであり、一人として不幸せな子供を作ってはならないと思います。家庭でも、地域でも、ましてや学校であるいは学級で取り残された子供がいてはいけません。その視点に立って、教師が謙虚に学び合い、切磋琢磨しあう研修の場がこれからも不可欠です。教育の力を信じ、地道に実践する教師でありたいものです。

さて、平成 22 年度後期研究教員狩俣典昭教諭（北中学校）は、研究テーマを【「**地域・関係機関と連携した『あそび・非行』不登校傾向生徒の支援のあり方**」～開発的生徒指導の視点での支援の工夫～】として研究を重ねてきました。

これまでの<課題設定・理論研究・調査・検証授業・まとめ>の研究手順とは違い、生徒指導の一つの壁になっていた地域との連携を具体的に構築することを研究の根本に据えて進めてきました。この研究の視点はきわめて新鮮です。

研究者本人は教育現場で生徒指導担当として、子供たちと真剣にぶつかり合い、時に保護者と対峙し、教育現場の葛藤の中で、子供たちの不登校の背景にある「居場所のなさ」「家庭不和」「親や教師への不満」「愛情不足による自尊感情の低下」「問題行動による自己顕示欲」をどのようにすれば解決できるかを真剣に考え続けてきました。

そして、これまでの経験を結集して導き出したのが、「生徒自身の『**よりよく生きようとする力**』を信じ、地域の『**人のあたたかさ**』をいかした『**気づき**』を促す『**出番**』づくりのとりくみ」です。推し量るに、ともすれば効果の上まらない生徒指導の現状に悩み続けた日々だったことでしょう。その中で、学校も地域社会も最後まで「子供を見捨てない」という「人の心の暖かさ」を信じ、絆を結び合うことの大切さをどうにか形にしようと努力する狩俣教諭の姿には学ぶべき事が多いと思います。

研究の目標「本地区独自の地域の活用法を開拓しながら地域、関係機関と連携し、対象となる不登校傾向生徒に責任感や自信を育てるための糸口を与え、将来における社会的な自立を促進していく。」を設定し、「JT - Plan」を作成、「JCI（宮古青年会議所）や多くの事業所の支援を得ながら、地域の人間力を活用するネットワークづくりに奔走してきました。その成果も徐々に形を成してきました。

これからの課題として考えられることは、ネットワークを生かした取り組みの継続と多くの方々の協力で作られたネットワークをもっと充実したものにしていくための「支援室づくり」であると考えます。そして、課題解決のために、教師の子供一人一人を大切にす学校現場の弛まぬ実践は元より、温かい家庭づくりとそれを支える教育行政、専門機関や地域の支援等、今一度振り返り、その重要性を再確認し、手を携えて真摯に取り組んでいくことが大切です。本研究が、生徒指導の新たな活路の開拓となり、親や教師の励みになればと願っております。

終わりになりましたが、研究活動に、ご指導・ご支援いただきました関係者の皆様に衷心より深く感謝申し添えます。

平成 23 年 3 月
宮古島市立教育研究所
所長 與儀 千寿子

平成22年度 後期

研究報告書

<生徒指導>

地域・関係機関と連携した

「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援のあり方

～開発的生徒指導の視点での支援の工夫～

⑧自分の将来（進路）に希望がもてる	く	1	2	3	4
「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。					
=人に長らく続くとは思ってなかったけど毎日来たら、職場の人達ともしたくなれて良かったです。					
あなた自身の今後の目標を書いてください。（学校生活・進路について）					
できるだけ休まないようにし、勉強は自分なりに少しずつ分かっていけるように頑張りたいです。					

宮古島市立教育研究所 第9期研究教員

宮古島市立北中学校 狩俣 典昭

目 次

I	研究の目的（テーマ設定理由）	1
II	目指す生徒像	2
III	研究の目標と研究の仮説	2
IV	研究構想図	3
V	研究計画	4
VI	調査研究	5
1	「あそび・非行」不登校傾向生徒へのアンケート	5
2	自立支援教室「きら星学級」の視察研究	7
3	「生徒指導体制」に関するアンケート	8
VII	理論研究	12
1	生徒指導の意義と自己指導能力	12
(1)	生徒指導の意義	12
(2)	自己指導能力とは	12
2	「開発的生徒指導」とは	13
(1)	生徒指導とキャリア教育	13
(2)	開発的生徒指導とは	13
(3)	本研究における開發生徒指導の基本的な考え方	14
3	これからの生徒指導の考え方と取り組み	14
(1)	これからの生徒指導の考え方	14
(2)	本研究における取り組みについて	15
VIII	実践研究	17
1	検証実践 「あそび・非行」生徒への個に応じた支援の実践	17
2	検証実践における実践例	20
(1)	「J T - P l a n」の実践より 「実践例1～11」	20
(2)	「J T - P l a n」と「学習支援」の並行実践より	31
(3)	仮説の検証「実践例1～11」を通して	32
①	生徒の自己評価、感想からの検証	32
②	学校対象「事後アンケート」からの検証	33
(4)	「J T - P l a n」事後評価	34
(5)	取り組みに関わって 「J T - P l a n」総括と展望	36
IX	研究の成果と課題	37
1	成果と課題	37
2	おわりに	37
	<主な参考文献・引用文献>	39
	<資料>	40

地域・関係機関と連携した「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援のあり方 ～開発的生徒指導の視点での支援の工夫～

宮古島市立北中学校 教諭 狩俣典昭

I 研究の目的（テーマ設定理由）

文部科学省の実施した「学校基本調査」によると県内の不登校の態様（継続の理由）は、中学生の場合「あそび・非行」が最も多く平成19年度が36.5%（1349人中）、平成20年度が36%（1463人中）となっている。本地区においても「あそび・非行」の割合は年度によって多少の増減はあるものの平成19年度が33%（42人中）、平成20年度が24%（25人中）と高くなっている。

また、本地区の大規模中学校のひとつである本校では昨年度（H21年度）「あそび・非行」不登校傾向生徒が急増し（表1）、それに伴い喫煙、暴力行為、怠学、授業抜けだし、授業妨害等の問題行動の発生件数も多発する状況であった。

そういった状況を改善するため、警察等と連携をとりながら予防的な対応として警察職員による「非行防止教室（写真1）」や「ミニ講話（年間6回）」等を実施し喫煙等の問題行動の減少や補導数の減少に一定の効果を挙げてきたが、「あそび・非行」の不登校傾向生徒への指導は容易ではなくそれら生徒の起こす問題行動への対処的な指導や先に記述した予防的な指導だけでは抜本的な解決に至っていないのが現状である。

今後も「あそび・非行」の不登校傾向生徒は年度によっては増加することが予測され、学校における集団生活の秩序を保ち、学習に適した環境を継続的に保障していくためにも、それら生徒への指導や支援策に新たな活路を見いだしていくことが必要であると考え

る。

先行研究によると「あそび・非行」不登校傾向生徒の心理には主に次の5点が挙げられている。

- ・ 自信がない、自己肯定感が低い（認められたりほめられることが少ない）
 - ・ 他者への不信感が強い（親、教師への不満、反抗）
 - ・ 自分のことを見てほしいという強い欲求がある（問題行動による自己顕示）
 - ・ 見捨てられることへの強い不安があり、心配してくれる人を強く求める（愛情不足）
 - ・ 居場所がないという思いが強い（学校や地域に活躍の場がない、家庭不和）
- 愛知県教育委員会 あそび・非行型不登校傾向生徒の支援プログラムより 平成22年3月

本研究では、「あそび・非行」不登校傾向生徒を対象とし、その心理を踏まえながら「人とのふれ合い」における相互作用の中で生徒自身が自らについて立ち止まって考え、「自分のやりたいことは何か」「やらなければならないことは何か」、「気づき」を促す「出番」づくりを実践していきたい。

実践に際しては、生徒自身の「よりよく生きようとする力」を信じ、個に応じた支援を重視する「開発的生徒指導」の視点で見通しを立て、島人の「人のあたたかさ」を活かした本地区独自の地域の活用法を開拓することによって、地域と関係機関を網羅した支援体制を確立していきたいと考える。

H21年度「あそび・非行又は無気力傾向不登校生徒の人数	
10～29日欠席	男子5名・女子1名
30日以上欠席	男子5名・女子2名
宮古島署による本校生徒補導総数 H22.4月～12月（前年同期比）	
H22年（63人）	H21年（212人）

↑ 表1 「不登校生徒数と補導数」



↑ 写真1 「非行防止教室 本校 H21.9.30」

II 目指す生徒像

「自己指導能力を身につけ社会的自立を目指す生徒」

- ①自分の課題に気づき、自分を伸ばすための糸口を見つけることができる
- ②自分を取り巻く環境や人との関わりについて考え、感謝する心を持ち、問題が生じたときに改善しようとする態度が見られる
- ③将来において「どんな自分になりたいか」「どんな人生を生きていきたいか」考え、希望をもつことができる

III 研究の目標と研究の仮説

1 研究の目標

本地区独自の地域の活用法を開拓しながら地域、関係機関と連携し、対象となる不登校傾向生徒に責任感や自信を育てるための糸口を与え、将来における社会的な自立を促進していく。

2 研究の仮説

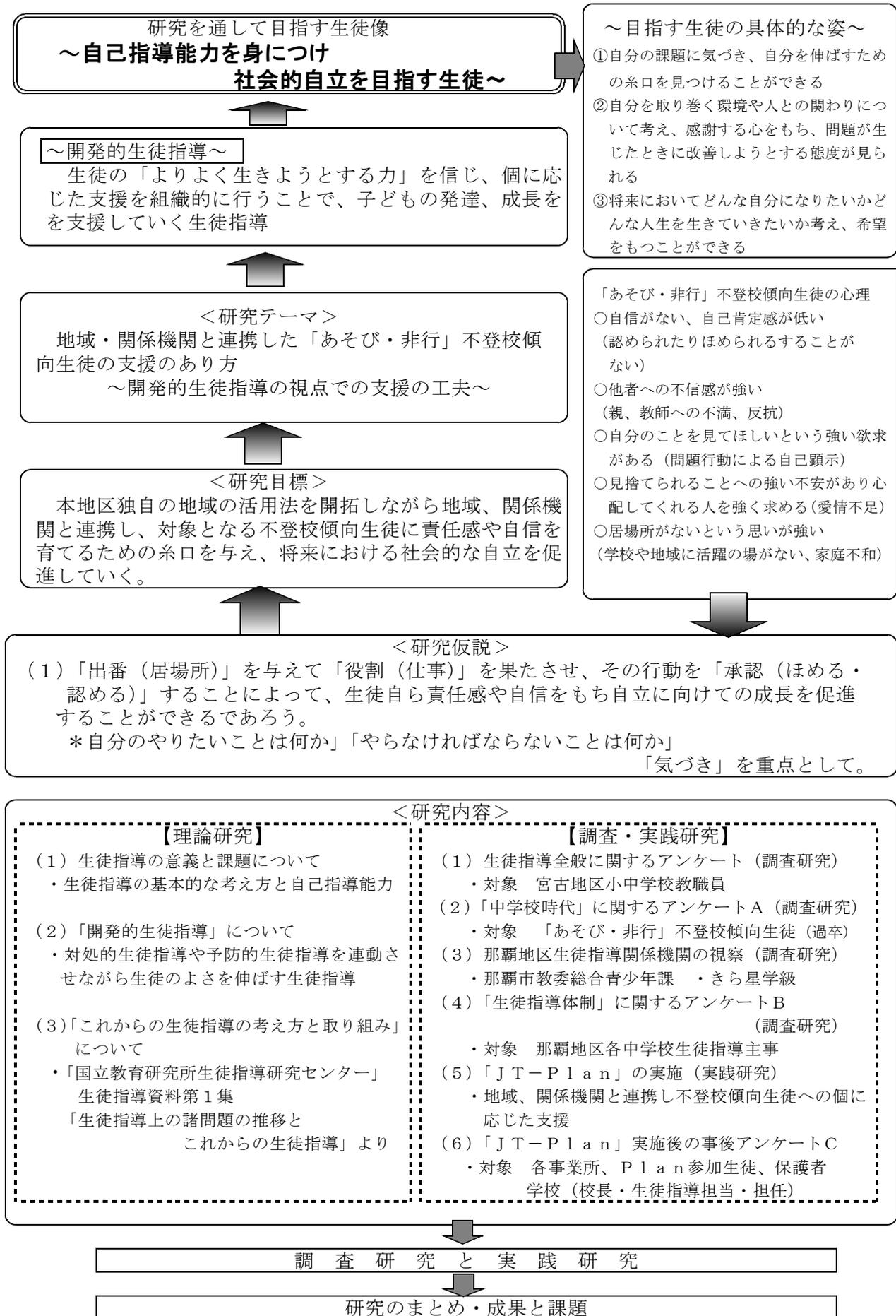
「出番（居場所）」を与えて「役割（仕事）」を果たさせ、その行動を「承認（ほめる・認める）」することによって、生徒自ら責任感や自信をもち自立に向けての成長を促進することができるであろう。

*「自分のやりたいことは何か」「やらなければならないことは何か」「気づき」を重点として。

3 仮説の検証計画

検 証 仮 説	検証の視点	検証方法	検証場面	検証結果
○「出番（居場所）」を与えて「役割（仕事）」を果たさせ、その行動を「承認（ほめる・認める）」することによって、生徒自ら責任感や自信をもち自立に向けての成長を促進することができるであろう。	①「役割」を果たし「承認」されることで自らに自信をもち始めているか。 「自己肯定感」 ②自らの課題に気づき自分を伸ばしていくための糸口を見つけ、将来に希望をもつことができているか。 「将来への希望」	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 検証の視点①、②共に 検証方法、検証場面、検証結果は同様とする。 </div>		
		○各事業所での生徒の観察 （画像による記録） ○アンケート ①生徒対象 ②保護者対象 ③学級担任対象 ④事業主	○実践の過程 ○実践の前後 又は実践後	○画像の記録及び記述にて残す ○数値化し、グラフに表す

IV 研究構想図



V 研究計画

月	研究内容	計 画
10	<ul style="list-style-type: none"> 研修テーマの設定・検討 参考文献, 資料の収集 参考文献, 研究資料等による理論研究 実践研究「J T - P l a n」の計画 実践研究 P l a nについて内容検討 調査研究 那覇地区生徒指導関係機関 中学校の調査研究 (きら星学級等) 調査研究「中学校時代」に関するアンケート A (対象 過卒生徒・保護者) 	1日 第9期研究員入所式 4日 オリエンテーション・研究の進め方 I 6日 研究の進め方 II 8日 全体構想図について 12日 J C Iへの協力依頼 13日 テーマ検討会① 15日 全体構想図検討会① 18日 調査「アンケート A」協力依頼 (対象生徒・保護者) 19日 「J T - P l a n」の内容確認 (委員会) J C I定例会への参加・協力依頼 (JCI) 20日 那覇市「きら星学級」訪問 21日 那覇市教育委員会総合青少年課訪問 22日 那覇市立真和志中学校、石嶺中学校訪問 25日 調査「アンケート A」回収 (対象生徒・保護者) 27日 「J T - P l a n」の内容最終確認 (JCI)
11	<ul style="list-style-type: none"> 研究についての進捗状況から今後の取り組みについて検討 参考文献・研究資料等による理論研究 中間検討会の資料作成 調査研究「生徒指導体制」に関するアンケート B (対象 那覇地区中学校生徒指導主事) 実践研究 P l a nについて内容検討 実践研究「J T - P l a n」の実施 (11月A期) 調査研究「生徒指導全般」に関するアンケート D 質問内容検討 調査研究「生徒指導全般」に関するアンケート D の実施 (対象 宮古地区各小中学校) 	1日 調査「アンケート B」発送 (那覇地区各中学校) 5日 理論研究について 調査「アンケート D」協力依頼 (平良・伊良部地区) 8日 調査「アンケート D」協力依頼 (下地・上野地区) 9日 調査「アンケート D」協力依頼 (城辺・多良間地区) 10日 研修進捗状況報告 11日 「J T - P l a n」協力事業所確認 (JCI) 12日 17日 中間報告会に向けて 16日 「J T - P l a n」A期実践スタート (3名) 17日 中間報告会 18日 「J T - P l a n」事業所追加依頼 (各事業所) 19日 調査「アンケート D」回収 (平良・伊良部地区) 24日 調査「アンケート D」回収 (下地・上野地区) 報告書作成に向けて 25日 調査「アンケート D」回収 (城辺地区)
12	<ul style="list-style-type: none"> 実践研究「J T - P l a n」の実施 (12月B期) 実践研究 P l a n各事業所訪問 (情報交換・挑戦生徒激励) 実践研究 P l a nの事後評価 C (対象挑戦生徒・各事業所) 	1日 「J T - P l a n」B期実践スタート① 7日 B期実践スタート② (計8名) 17日 学習支援についての検討会 (宮古島署) 20日 「J T - P l a n」の事後評価依頼 (各事業所) 「P l a n」継続について意見交換 (久松中) 22日 「J T - P l a n」の事後評価回収 (各事業所)
1	<ul style="list-style-type: none"> 研究についての進捗状況から今後の取り組みについて検討 参考文献・研究資料等による理論研究 報告書検討会への準備 報告書内容の検討 実践研究「J T - P l a n」の実施 (1月C期) 実践研究 宮古島署「少年支援要員」 による学習支援へのサポート 	7日 報告書検討会① 11日 「J T - P l a n」C期実践スタート (3名) 「P l a n」学習支援スタート (久松中) 12日 「P l a n」学習支援スタート (花福) 13日 「J T - P l a n」事後評価 C 依頼 (久松中) 「J T - P l a n」事後評価 C 依頼 (平良中) 14日 「J T - P l a n」事後評価 C 依頼 (北中) 24日 報告書検討会② 28日 報告書検討会③
2	<ul style="list-style-type: none"> 研究報告書の作成 文献資料の整理 報告書検討会への準備 報告書内容の検討 	4日 報告書検討会④ 14日 報告書検討会⑤ 16日 報告書検討会⑥ 21日 報告書検討会⑦ 23日 報告書提出
3	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果報告会の準備 研究報告書のまとめと反省 年間計画, 全体計画作成 研究報告会, 研究のまとめと反省 	8日 研究成果報告会 28日 第9期長期研究員 終了式

VI 調査研究

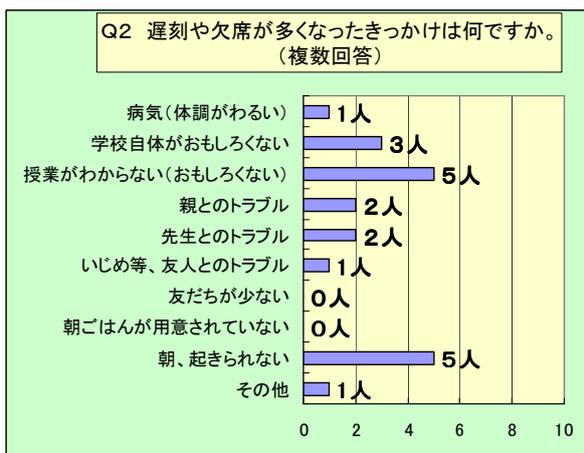
1 「あそび・非行」不登校傾向生徒へのアンケート

「あそび・非行」傾向の過卒生徒（H21年度卒業生・保護者）を対象とし、先行研究（平成22年3月 愛知県教育委員会 あそび・非行型不登校傾向生徒の支援プログラム）によるそれら生徒の心理や特徴について「アンケート」により検証する。

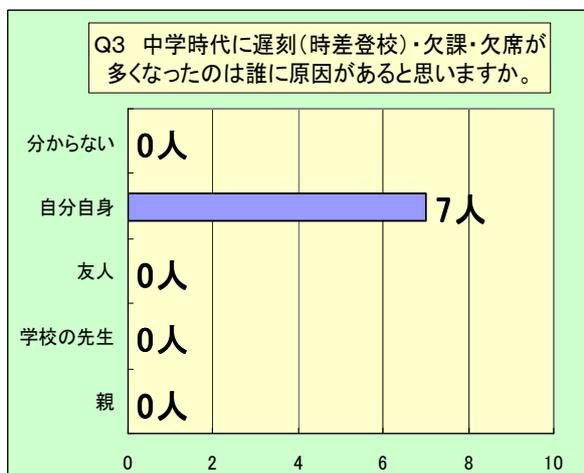
「あそび・非行」不登校傾向生徒へのアンケート（A） 平成22年10月実施
対象 「あそび・非行」傾向の過卒生徒（H21年度卒業生7名・保護者3名）



図A-1 「アンケートA結果」



図A-2 「アンケートA結果」



図A-3 「アンケートA結果」

質問1 遅刻(時差登校)・欠課が多くなったのはいつ頃からですか。

〈考察〉

ほとんどの生徒が本校で問題行動が多発したH20年度(中学2年時)から遅刻(時差登校)・欠席が多くなったとしているが、小学校から多くなったとする生徒もいる。不登校を早期に改善することができず長期化してしまったということになるが、いずれにせよ遅刻や欠席が多くなり始めたタイミングでの早期対応、指導が重要であろう。

質問2 遅刻や欠席が多くなったきっかけは何ですか。(複数回答)

〈考察〉

「朝、起きられない(5人)」「授業が分からない(5人)」が多くなっている。深夜徘徊、夜更かし等による「生活習慣の乱れ」や「低学力」が非行や不登校に陥った原因と見られる。やはり、低年齢(学童期)の段階から基本的な生活習慣の確立、学習指導の充実(分かる授業、個別指導)を図っていくことが求められる。

質問3 中学時代に遅刻(時差登校)・欠課・欠席が多くなったのは誰に原因があると思いますか。

〈考察〉

全員(7人)が「自分自身」としている。中学在学時は、親や教師に反発しながらも、卒業し時間が経つにつれ、態度や考え方に変容が見られる。就労先(アルバイト)等での他の大人との関わり、また、そこででの勤労、社会体験をすることで自らについて冷静に分析することができていると考える。



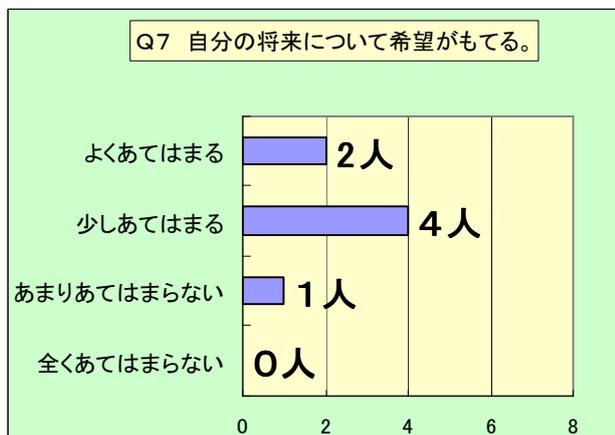
↑ 図A-4 「アンケートA結果」



↑ 図A-5 「アンケートA結果」



↑ 図A-6 「アンケートA結果」



↑ 図A-7 「アンケートA結果」

質問4 中学時代の学校生活では活躍の場があった。

〈考察〉

7人中6人が、「あてはまらない（活躍の場がなかった）」としている。在学時、部活動には所属していなかった。あるいは途中で退部してしまった生徒がほとんどである。また、問題行動や欠席が続くことで学級活動や学校行事等においても活躍の場を与えることができなかったと考える。それが結果的に居場所のない状況を生んでいる。

質問5 中学時代、先生や親によくほめられた。

〈考察〉

7人中5人が、「あてはまらない（ほめられることがなかった）」としている。質問4に関連して、活躍の場がなければ賞賛されたり承認されることも少ないであろう。「あそび・非行」傾向の生徒に学校生活の中で「活躍の場」を設けることは難しいものがある。地域や関係機関と連携しその方法や内容を検討する必要がある。

質問6 自分自身に自信がもてる。

〈考察〉

7人中5名が、「あてはまらない（自信がもてない）」としている。自己評価が低いということは、やはり成功体験が乏しいことに原因がある。活躍の場（居場所づくり）を与え、そこでの成功から自己存在感や自己肯定感を育むことができるであろう。

質問7 自分の将来について希望がもてる。

〈考察〉

7人中6名が、「あてはまる（将来に希望がもてる）」としている。保護司等の関係機関からはたらきかけもあって就労（アルバイト）し始めている生徒がほとんどである。自分自身に自信は持っていないが、将来への希望は持ち始めており、社会的に自立していけるよう今後も頑張ってもらいたいものである。

2 自立支援教室「きら星学級」の視察（調査）研究

- 視察年月日 平成22年10月20日
- 視察場所 那覇市寄宮 真和志庁舎内
自立支援教室「きら星学級」
- 視察内容 「あそび・非行」傾向の不登校生徒の支援について



写真2「きら星学級」

(1)「きら星学級」とは

平成15年11月、那覇市立教育研究所内に「あそび・非行」不登校生徒を支援するための教育支援室としてスタートする。現在は、自立支援教室「きら星学級」として設置されている。

(2)支援対象生徒及び支援の目的

あそび・非行傾向の不登校児童生徒に対し、学校復帰に向けて支援するための教室。

- *「あそび・非行」の不登校生徒には「きら星学級」
- 「心因性」の生徒には「あけもどろ学級」で支援を行っている。

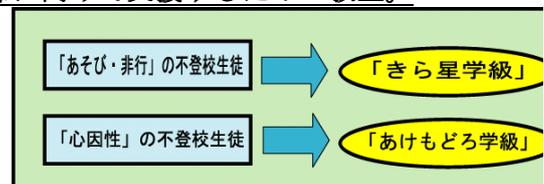


図3「支援対象生徒」

(3)支援の種類

支援の種類	期間	支援内容
①通級支援	1ヶ月～	<ul style="list-style-type: none"> ・きら星学級に通級する児童生徒を支援（基本スタイル） ・週2～3回、3時間程度の通級。（午前か午後） ・「1対1」の支援が原則（他の生徒との関わりを持たせない）
②一時支援	1時間～	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急対応 学校にて対応の難しい児童生徒を一時的に支援（校内徘徊・授業妨害等の生徒）
③集中支援	2週間	<ul style="list-style-type: none"> ・各種機関（児童自立支援施設等）から学校へ復帰する児童生徒 ・集中的な支援を必要とする児童生徒に対しての支援
④学校支援	1ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> ・直接学校に出向いて児童生徒を支援
⑤その他		<ul style="list-style-type: none"> ・特別体験活動や職場体験の実施 ・出前講座（学校にて寸劇を交えた特別学級をする）

(4)支援の重点ポイント

- 1対1で対応する
 - ・信頼関係を気づくため
 - ・生徒間の広域交流防止（他校・他市町村）
- 基本的に毎日の通級ではない
 - ・週2～3回の午前または午後の3時間程度
- 体験活動が多い
 - ・いろいろな活動を通して、「気づき」の場を提供する。

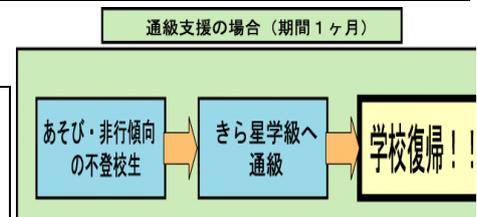


図4「通級支援」



写真3「きら星学級」

(5)活動内容

- ・面接相談
- ・学習支援
- ・調理実習
- ・自然体験
- ・栽培活動
- ・奉仕活動
- ・創作活動
- ・登校支援
- ・スポーツ
- ・職場体験
- ・施設見学

(6) 支援スタッフ

- 「きら星学級 担任」(1名)
 - ・「小中学校の教諭から公募で1名」
- 相談員(1名)
 - ・「臨床心理士」面接、相談、各種検査等の対応
- 支援員(5名)
 - ・「教員志望の若手スタッフが多い」



写真4 「きら星学級」

(7) 所 感

「きら星学級」の経営方針や運営状況について、同教室担任から丁寧に説明をして頂いた。非行等の様々な理由で学校に適應できない子ども一人ひとりをしっかりと受け止め、親身になって支援している様子を十分に察することができた。起こした問題について、あるいは不登校の状況について指導することも大事ではあるが、まずは、子ども達に「居場所」を提供し、様々な体験活動を通して信頼関係を築き自信を付けさせていく。変わることを求める前に「変わることのできる機会(きっかけ)」を与えることがいかに重要であるかを「きら星学級」から学ぶことができた。

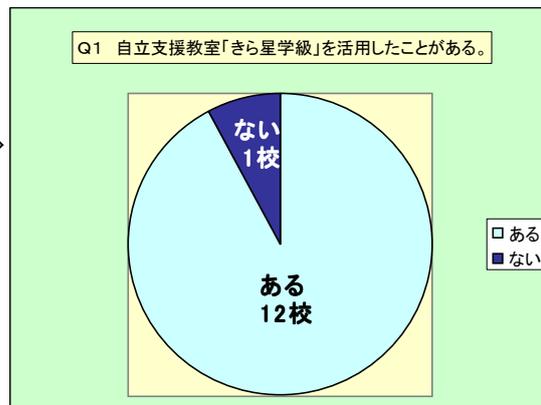
3 「生徒指導体制」に関するアンケート

「生徒指導体制に関するアンケート」(B)より

実施：平成22年11月 対象：那覇地区各中学校生徒指導主事 回収率 13/18校

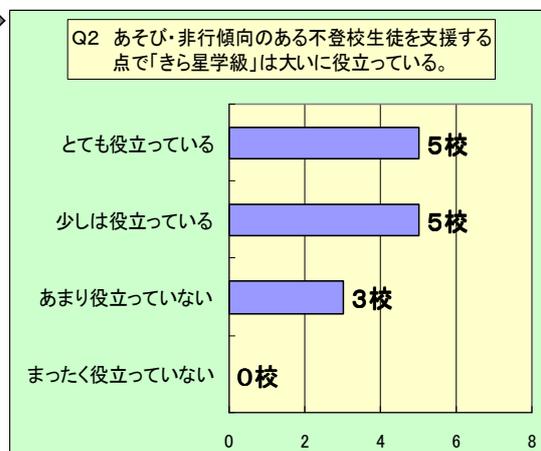
質問1 自立支援教室「きら星学級」を活用したことがある。

活用したことがある	12校
活用したことがない	1校



質問2 あそび・非行傾向のある不登校生徒を支援する点で「きら星学級」は役立っている。

とても役立っている	5校
少しは役立っている	5校
あまり役立っていない	3校
まったく役立っていない	0校



〈質問1, 2の考察〉

13校中12校は「きら星学級」を活用したことがあり、その内10校は「あそび・非行」の生徒への支援に役立っているとしている。

各校から「きら星学級」までの距離(地理的条件)や支援場所を校内中心にするか「きら星学級」にするか等、生徒指導の方針によって活用の仕方に多少の差異があるが、那覇地区中学校全体において「きら星学級」は、非常に有効に活用されていると察する。(具体的な活用例については次ページに記す。)

質問3 「きら星学級」の活用例を記入してください。

- ・学級に入れない「あそび・非行」傾向の生徒への特別カリキュラムの一環として2日間通級させた。(活動内容 調理実習 海岸のボランティア清掃 裁判の見学)
- ・怠学傾向の生徒を受け入れてもらい通級させている。
- ・「あそび・非行」生徒も類型が様々である。学校の「居場所」が合わない生徒、学校で他の生徒に迷惑を及ぼす生徒、発達障害型の要因のある生徒等、類型によって、曜日や時間の工夫をして学習支援等を行ってもらっている。
- ・厳しいのは校舎内を徘徊する生徒への対応である。登校中は継続して対応するので対応教員が大変である。だから、「きら星」を工夫利用している。
- ・登校しても身なりが悪くて教室に入室できない生徒を、きら星で預かってもらい、相談を通して身なりを直していく活動をしてもらった。
- ・少年鑑別所からの退所時から登校再開までの、子どもへの支援のため。
- ・学校側の指導に応じず、登校しない子どもへの支援のため。
- ・2年生の頃から「あそび・非行」になった生徒を保護者と相談した上で、3年の6月頃から夏休みに入る前まで、週2回の通級を行った。学習支援及びボランティア活動、野外体験活動等、いろいろなことをやってもらった。
- ・学校へなかなか登校できな生徒への支援と問題傾向がある生徒の一時預かりをしてもらった。
- ・幼稚園や老人ホームでの体験学習を実施してもらった。
- ・登校するきっかけ、リズムをつくるために預かってもらい活用した。
- ・3年生男子だが、保護者の協力が全く得られないため、きら星学級へ送迎してもらっている。
- ・学級に入らない生徒がとりあえず通級したが、長持ちしなかった。
- ・あそび・非行の生徒で、実際にきら星学級の利用まではいかなかったが、興味を持った際に学級の見学をさせてもらった。

質問4 今後、「あそび・非行」不登校傾向生徒への支援について、どのような進め方がよいか記述してください。

○校内における支援

「校内生徒指導体制・生徒指導方針」

- ・やはり学級担任が一番に支援しないといけないので、生徒指導主事は個別の支援はやらないようにし、学級担任や学年で支援をするように促している。
- ・事前に学校の方針を図り、共通理解・共通実践を実施する。
- ・生徒の話をしっかりと聞いていける環境をつくる
- ・遊び・非行傾向の生徒、心因性の生徒の双方を受け入れる教室の校内設置。
- ・本校では「学校にいれる」指導をしているが、相談室の使用の仕方も含めて難しい面が多い。→職員同士の連携
- ・排除ではなく、学校における居場所作りの強化。
- ・居場所づくり(何か興味を持たせる) 対応する教師の負担が問題(人員確保)

「個別支援の充実」

- ・今後は、学習ボランティアなどの活用で教室に入れなくとも別室で学習する環境を整えていく。(現在、心因性の不登校生徒へはそれを行っているが、遊び非行の生徒に関してはまだ十分でない)

- ・学習の遅れが原因である可能性が高いので個別の学習支援が必要になる。
- ・学習の遅れがみられる生徒がほとんどなので学習支援ボランティアや学習支援のサポーター等の活用を積極的に行いたい。
- ・1年生の時点で学習の遅れた生徒のピックアップと対応を行う。
(できれば小学校と連携して小学校時に対応した方がよい)

「家庭との連携」

- ・生活習慣の改善を家庭と連携して行う。
- ・保護者との連携、説明、協力依頼など、保護者との関係づくりが重要で、担任の力量を上げていかないといけない。
- ・保護者との密な連携と信頼作りの強化。
- ・保護者へのカウンセリングの専門家からの相談、相談後の継続連携〈2校〉
- ・親への対応（支援も含む）この問題がどのようにしてよいか一番悩んでいる。
- ・保護者の指導力不足が一番の課題であるとする。

○行政や地域、関係機関と連携した支援

「行政機関との連携」

- ・N市は、生徒指導主事への支援や生徒の居場所づくりにおいて、県内では取り組んでいる自治体の1つで、学校も非常に助かっている。地域との連携等においては、気苦労や課題もあるが、成果は十分に挙げられている。
- ・那覇市では総合青少年課が学校の生徒指導主事と常に連絡を取り合い、昼の情報交換だけでなく、懇親会も含めて連携を深めている。
- ・きら星のような預かり施設、積極的に家庭訪問をしてくれたり、学校と連携をして動いてくれる職員が必要。

「生徒サポーター（N市配置職員 各中学校1名配置）との連携」

- ・生徒だけでなく保護者の支援が必要なが多いので、生徒サポーターには「地域の相談役」になってもらい、学校とのパイプ役になってもらいたい。
- ・生徒サポーターの増員と勤務時間を増加し、時間をかけてじっくりと生徒と向き合ったり、生徒指導主事を支援できる時間が増加できれば、生徒に必ず還元できる。
- ・生徒サポーターの効果的活用（人員増により負担が少なくなる）

「地域との連携」

- ・地域の人材バンク作りと活用の強化、学習ボランティア等の活用の強化
- ・地域での居場所作りの強化。（地域行事、ボランティア等）
- ・地域を巻き込んだ健全育成の強化。（PTA 健全育成部の活性化、夜間街頭指導の強化等）
- ・退職教員などを活用した個別の学習支援
- ・非行により学習が厳しい生徒を受け入れる職場の設置。
- ・地域による子どもの受け入れ態勢の確立。（本校では青年会や旗頭保存会などがそれにあたるが、そのような団体との連携はどこの学校でも今後重要になってくると感じる）この場合男子生徒は居場所作りができるが、女子生徒では対応が難しくなることもあり、女子生徒の居場所作りが課題である。

「警察・裁判所との連携」

- ・警察と月に2回程度、情報交換をしている。その中で、警察にしてほしいこと、学校に出来ることを、本音で話し合い協力体制を築いている。また警察からも児童相談所や家庭裁判所に連絡を取ってもらい、学校の現状を相談してもらっている。
- ・**県警少年サポーターやN署少年課の学習ボランティアの活用（学習支援）〈2校〉**
- ・**豊見城署、県警少年サポートセンターは、学校の依頼があると事件化して対処してくれたり保護者への相談・指導を行ってくれたり、非常に助けてもらっている。本校では警察の支援なしには、今の学校の現状はなかったと痛感している。**
- ・那覇署や県警との情報交換や連携の強化。（現在は、月1回の情報交換がある）
- ・那覇市の場合は警察のほうに問題傾向の親の会「コスモス会」というものがあるので今後利用していきたい
- ・警察機関との連携重視。（話し合いには、必ず警察を入れる）
- ・警察、児相との連携。1学校に担当の警察官、児相担当職員を置けないか。
- ・深夜徘徊等の問題に対しては家庭裁判所との積極的な関わりを行う。（保護者といっしょに相談に行く）
- ・施設への入所（学校ではどうしようもなく、保護者の協力も得られない場合、大きな問題を起こす前に早めに入所させ善悪の判断をつけさせたい）

「生徒指導体制の拡充（ネットワークづくり）」

- ・**生徒指導委員会で「非行傾向生徒」への対応方針を決定、明確（責任化）にする。** 民生委員、保護司、場合によっては警察署員を活用し、家庭支援を行なう。さらに、教育相談においては、警察サポートセンターの参加や、保護司、民生委員、行政職員も入れている。サポートチームは状況を見て立ち上げている。
- ※「非行傾向生徒」への特効薬はない。普段からの関わりを通して、「関係づくり」を構築する。（できれば小学校時から。中三からは指導に従わない）さらに、その子ども達に合った「居場所づくり」を模索する。
- ・深夜徘徊、無断外泊などは、家にいたくない、家に人がいない場合が多く、家庭の問題がほとんどである。親への支援を、関係機関と協力したいが、どのようにしてよいかわからない。

〈所感〉

那覇市では、平成16年4月から児童生徒の不登校問題を教育の最重要課題の一つととらえ、「遊び・非行」傾向の児童生徒への支援を「やる気・元気サポート室」や「きら星学級」等に対応してきた経緯がある。

現在においても「きら星学級」の運営は継続され、新たに各中学校に派遣された「生徒サポーター」等、基本的な支援体制は確立されている。各中学校からは、それぞれに校内の生徒指導体制や他の関係機関との連携等に課題も挙げられるが、本研究においては那覇地区の取り組みを参考にしながら、宮古地区ならではの地域や関係機関の活用法を開拓していきたいと考える。



↑ 写真5 「石嶺中学校内地域連携室」

* 写真男性は同校生徒サポーター
「大城貞彦氏」

Ⅶ 理論研究

1 生徒指導の意義と自己指導能力

(1) 生徒指導の意義

生徒指導の意義に関して、「中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説－総則編」では、次のように示されている。

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の慎重を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています。生徒指導は学校の教育目標を達成するうえで重要な役割を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものと言えます。

各学校においては、生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要です。

(2) 自己指導能力とは

①生徒指導提要（平成 22 年 3 月）文部科学省」では、次のように示されている。

自らの人格の完成を自ら希求する児童生徒を育てるということは、教育にとって最も困難な課題ということもできるでしょう。なぜなら、教育の方法として、「与える」「導く」「型にはめる」などの方法をそのまま用いたのでは、自発性や自主性を強要することになりかねず、本来の意味での自発性や自主性をはぐくむことができないからです。

教育という言葉は、「大人が子どもを教育する」というように、大人が主語で子どもが目的語になる形で用いられることが一般的です。生徒指導についても、そうした側面を有するものです。しかし、人格の完成については、「児童生徒望ましい大人になる」というように、児童生徒自身が主語となる形で行われていく必要があるのです。

もちろん、あらゆる行動を一から児童生徒に決めさせていくことは不可能です。学校教育の場においては体系性や計画性も求められます。しかし、指導の中で児童生徒が主体的に取り組めるような配慮を行うことで、自発性や自主性、自律性がはぐくまれるようにしていくことは可能です。自分から進んで学び、自分で自分を指導していくという力、自分から問題を発見し自分で解決しようとする力、自己学習力や自己指導能力、課題発見力や課題解決力というものが育つ指導を行っていくことが望まれます。

②「生徒指導の機能論の提唱 坂本昇一（2001）学校図書」では、次のように示されている。

生徒指導の目的は自己指導能力の育成にある。それは、消極的・積極的を問わずにあてはまることである。その自己指導能力とは「その時、その場でどのような行動が適切であるか自分で決めて、実行する能力」と定義付けされている。そして、さらに、「“どのような行動が適切か” その適切性を決める基準は、他の人の主体性の尊重と自己実現とである。くだけでいえば、他の人のためにもなり、自分のためにもなるという行動を児童生徒が自分で考えることである。」とされる。

2 開発的生徒指導について

(1) 生徒指導とキャリア教育

開発的生徒指導の目指すところにキャリア達成があることが、「新生徒指導ガイド 八並光俊・國分康孝（2008） 図書文化社」に示されている。

「生徒指導とは、子ども一人ひとりのよさや違いを大切にしながら、彼らの発達に伴う学習面心理、社会面、進路面、健康面などの悩みの解決と夢や希望の実現を目指す総合的な個別発達援助である。」（八並光俊「生徒指導」ナカニシヤ出版 2008年）

すなわち、生徒指導は、子ども一人一人の異なる教育的なニーズや実態（個別的）に関する生徒指導に基づいて、発達段階に応じた（発達の）、多面的な援助（総合的）を行い、個性と社会の育成を図りながら、主体的な進路の選択・決定を促進し、すべての子どもの学校から社会へのスムーズな移行（School To Career：スクール・トゥ・キャリア）を援助する。例えば不登校生徒の生徒指導では、教室復帰や学校復帰が問題解決のゴールではない。むしろ、当該生徒のおかれている実態を十分に把握し、生徒の人間的な成長をどのように援助し、「なりたい自分にどうなるのか」というキャリア達成が焦点となる。

(2) 開発的生徒指導とは

開発的生徒指導に関して「新生徒指導ガイド 八並光俊・國分康孝（2008） 図書文化社」

「開発的生徒指導論と学校マネジメント 倉本哲男（2007） ふくろう出版」では、次のように示されている。

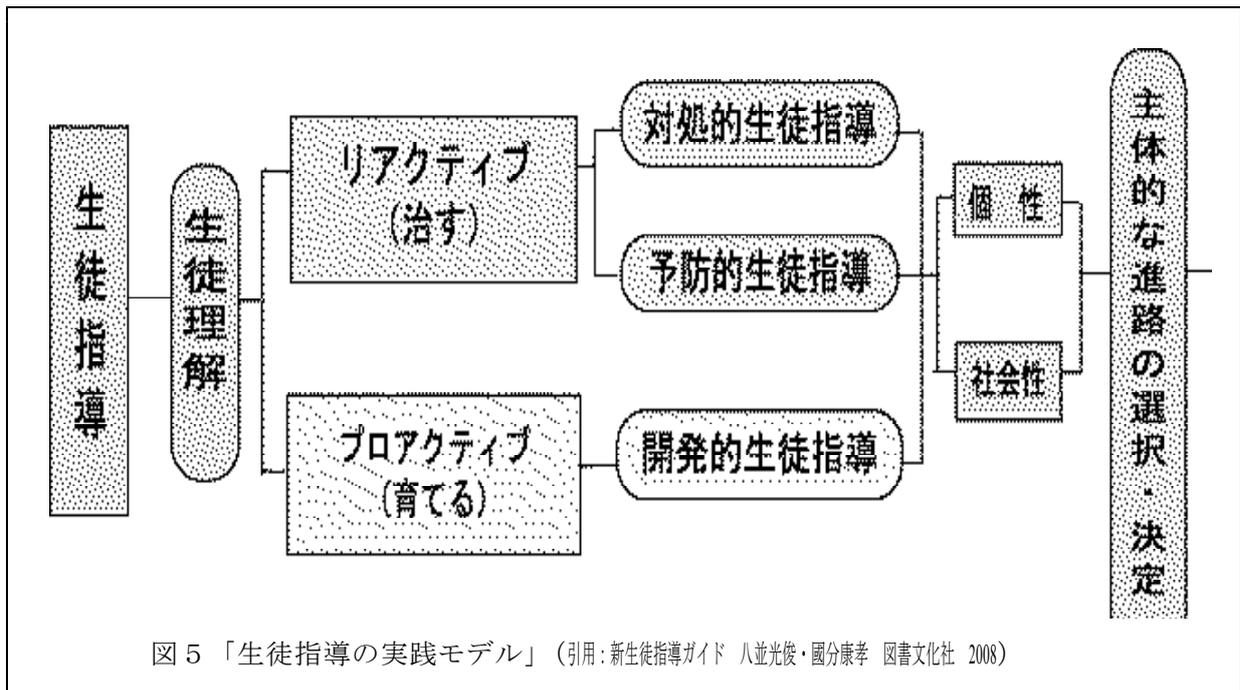


図5 「生徒指導の実践モデル」（引用：新生徒指導ガイド 八並光俊・國分康孝 図書文化社 2008）

生徒指導は、対象・時期などにより分類（実践モデル）できる。

（分類は上ページの図5を参照）

① 「対処的生徒指導」とは、

生徒の問題行動が発生した場合に教育的に対応し、望ましい状態に導く生徒指導のことである。生徒の問題行動は単発的指導で改善できることは極めて少なく、事例によっては医療機関・法的機関・福祉的機関との連携も課題となり、総合的・継続的指導を要する。

その典型例は、万引き・恐喝・暴力・ドラッグ・いじめ・不登校等である。

②「予防的生徒指導」とは、

学級・学校等の集団秩序を保ち、集団性を高めるために必要な基本的な生徒指導である。
また、初期の段階で問題解決を図り、深刻な問題に発展しないように予防する指導もそれに該当する。その例として「服装検査」「非行防止教育」「犯罪被害防止教育」等がある。

③「開発的生徒指導」とは、

- a 「生徒のよさ」を日常の教育活動から発見し、自覚させ、伸ばしていく生徒指導の総称のことである。
- b すべての生徒がもつ「よりよく生きようとする力」を信じ、個に応じた支援を組織的に行うことで、子どもの発達、成長を支援していく生徒指導である。

(静岡市教育センター 子ども理解に立った開発的生徒指導研究より 平成19年3月)

生徒指導は「対処」と「予防」に限定される傾向があり、問題を矯正することに主眼が置かれがちであった。開発的生徒指導とは具体的には、認め・褒め・育てていく過程で生徒の自己肯定感を育成し、社会における自己実現を図っていく生徒指導である。

(3)本研究における開発的生徒指導の基本的な考え方

先にも記述したが、先行研究によると「あそび・非行」不登校傾向生徒の心理には主に次の5点が挙げられている。

- ・自信がない、自己肯定感が低い（認められたりほめられることが少ない）
- ・他者への不信感が強い（親、教師への不満、反抗）
- ・自分のことを見てほしいという強い欲求がある（問題行動による自己顕示）
- ・見捨てられることへの強い不安があり、心配してくれる人を強く求める（愛情不足）
- ・居場所がないという思いが強い（学校や地域に活躍の場がない、家庭不和）

(愛知県教育委員会 あそび・非行型不登校傾向生徒の支援プログラムより 平成22年3月)

「あそび・非行」不登校傾向生徒への指導は容易ではないが、問題行動を繰り返している状況においては、**教師は毅然とした態度で「対処的生徒指導」での対応を進めながらも「開発的生徒指導」の視点を持つことが必要である**と考える。

つまり、「お前はやっぱりダメな生徒だ」と決めつけず、上記5つの心理にあることを理解し、その生徒が活躍できる出番（場面）をつくることで承認・賞賛を重ねていきながら問題の解消について気づかせていくことが大切である。

また、「ほんとうの生徒指導とは、卒業までのことを考えるのではなく、子どもの30年後、50年後のことまで考えた指導である。」(ある生徒指導達人教師の言葉 諸富祥彦「7つの力を育てるキャリア教育」図書文化社 2007)
その言葉にあるように、今現在行われている指導・支援はキャリア達成に向けて行われているという中長期的な視点で捉えることも重要で、将来における自己実現、社会的な自立がゴールであることを認識したい。

3 これからの生徒指導の考え方と取り組み

(1)これからの生徒指導の考え方

県内においては、青少年の深夜徘徊等の非行が社会問題としてクローズアップされ、その問題の背景にはやはり沖縄の夜型社会にあるとされる。

これからの生徒指導の在り方を考えるに当たっては、青少年の生きる時代状況や社会環境、そこでの子どもや大人の意識や在り方、学校教育の状況（抱え込み、行き詰まり）等、多面的、総合的に考えることが必要であると言われる。

「国立教育研究所生徒指導研究センター」によると、これからの生徒指導は、次のような視点（次ページ）から見直していくことが大切であるとしている。

- ・青少年を取り巻く社会環境等の変化を視野に入れた**社会的自己指導能力の育成**
- ・学校における**生徒指導体制・相談体制の充実改善**を図る**開かれた生徒指導の確立**
- ・問題行動等の予防や解決、健全育成を推進する**ネットワークと行動連携の実現**

(国立教育研究所生徒指導研究センター「生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導 2009年3月」より)



(2)本研究における取り組みについて

本研究においては、右記①～④の視点で、地域の大人社会に本校、または本地区中学校の生徒指導の現状（「あそび・非行」の不登校傾向生徒の現状と問題点）について情報を提供し、課題を共有することで、「あそび・非行」あるいは「不登校」に関する問題意識を高めていきたい。

その際、その地域（大人社会）としての関わりを「JCI（宮古青年会議所）」に依頼し「あそび・非行」不登校傾向生徒への具体的な支援策を提案し、地域・関係機関を網羅した新たな支援体制（ネットワーク）を開拓していきたい。そして、その中で対象となる生徒の社会的な自立を目指した実践研究を進めていきたいと考える。

「本研究における4つの視点」

- ①開かれた生徒指導の確立
- ②生徒指導体制・相談体制の充実改善
- ③ネットワークと行動連携の実現
- ④社会的自己指導能力の育成



写真6 「JCI 宮古青年会議所会館」

(3) 本研究（実践研究）におけるイメージ図

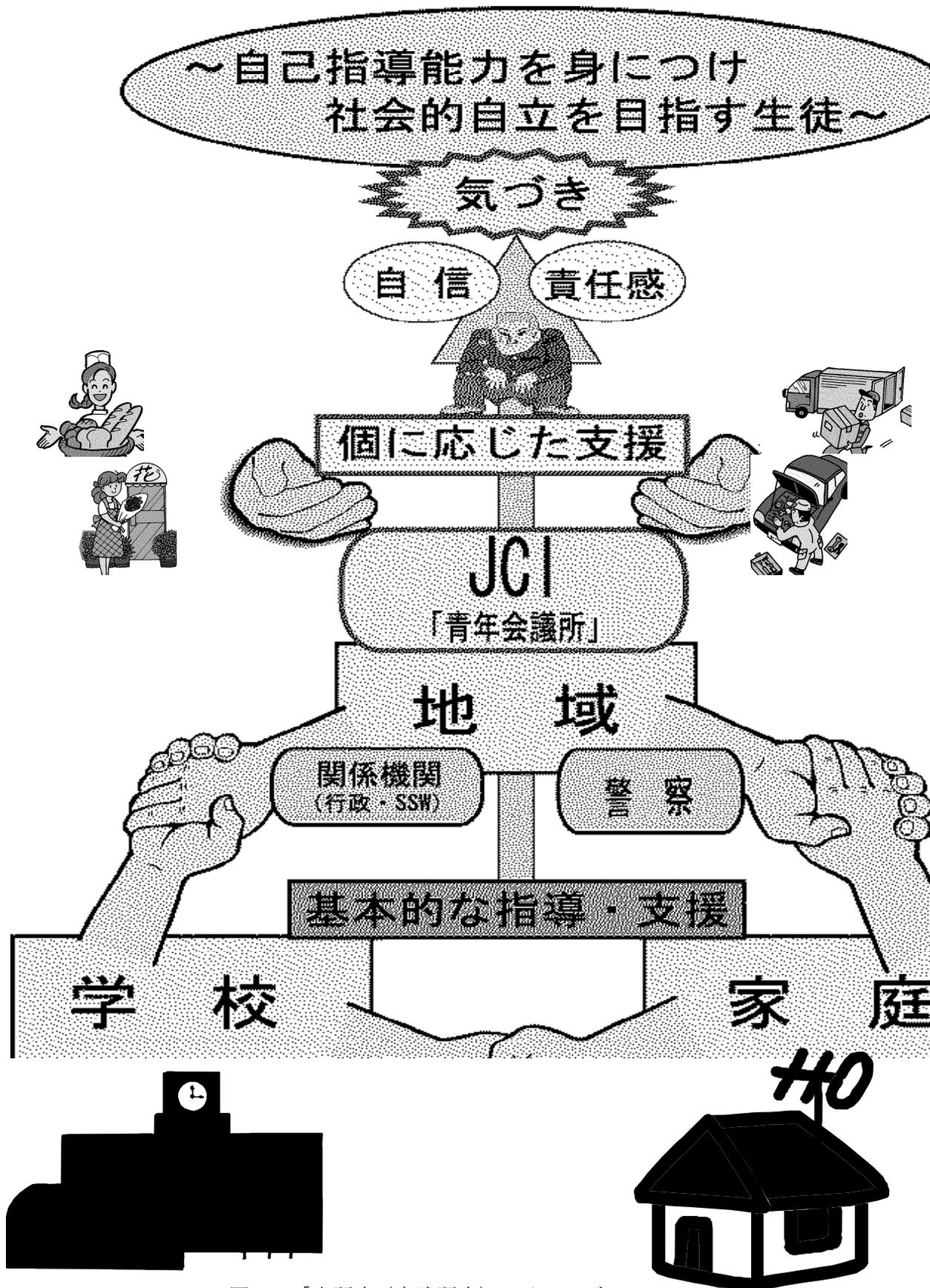


図6 「本研究（実践研究）のイメージ」

VIII 実践研究

1 検証実践 「あそび・非行」不登校傾向生徒への個に応じた支援の実践

研究の仮説

「出番（居場所）」を与えて「役割（仕事）」を果たさせ、その行動を「承認（ほめる・認める）」することによって、生徒自ら責任感や自信をもち自立に向けての成長を促進することができるであろう。

* 「自分のやりたいことは何か」「やらなければならないことは何か」
「気づき」を重点として。

検証実践

「あそび・非行」不登校傾向生徒への個に応じた支援を地域・関係機関と連携し実践を進める。

具体的な実践例

「J T - P l a n」
～ J o b T r i a l P l a n ～



(1) 実践の趣旨

中学生期の健全育成を計り、自らの進路や生き方について真剣に考える態度を養い、将来に向けて社会的自立を促していくことを趣旨とする。

(2) 実践の目的

- ① 自らの進路や生き方について考える土台とする。（個に応じた指導・生き方指導）
- ② 事業所で働く人々とふれ合うことで、「自分のやりたいことは何か」「やらなければならないことは何か」自らについて考える機会とする。（人間的な交流・気づき）
- ③ 社会での基本的なマナーや常識について学び、将来における社会的自立を目指す。（自己指導能力・自立）

(3) 実践協力機関

J C I（宮古青年会議所） 宮古島市教育委員会 宮古島警察署

(4) 対象校

宮古島市立北中学校 宮古島市立平良中学校 宮古島市立久松中学校

(5) 対象生徒

上記、対象校の生徒（1年～3年）で

- ① 「あそび・非行」の不登校生徒、また、その傾向のある生徒
- ② 「無気力（怠学）」の不登校生徒、また、その傾向のある生徒
- ③ 生徒指導上の出席停止又は特別指導を受けている生徒

(6) 実践期間

原則として次のA、Bの期間とする。

A期 平成22年11月15日（月）～26日（金） 2週間

B期 平成22年12月6日（月）～17日（金） 2週間

*実施曜日 原則として火、水、木の週3日とする。

*実施時間 原則として午前中（3時間程度）に設定する。

(7)実践方法

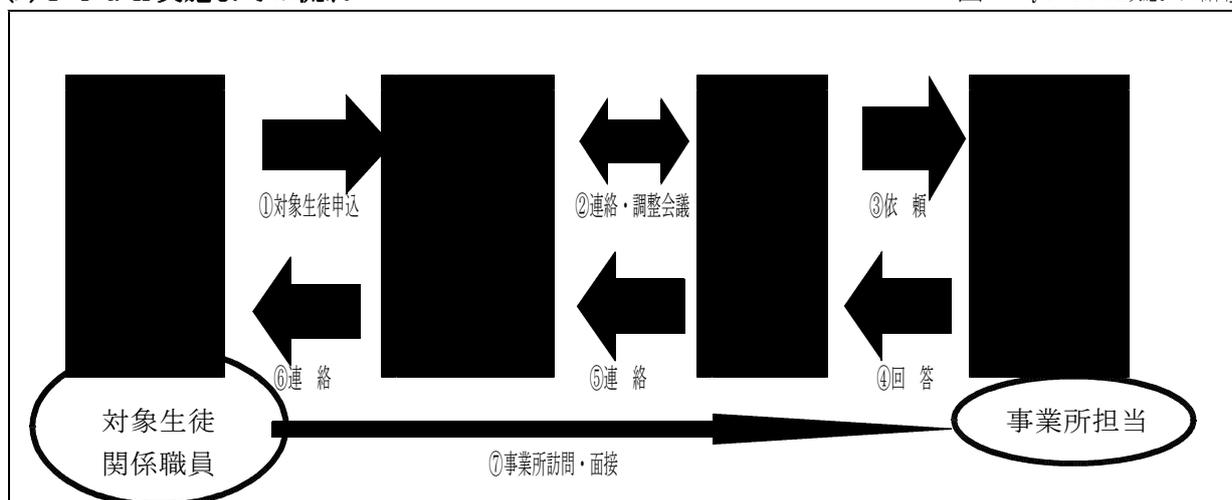
- ①原則として1事業所1名とする。
- ②対象生徒は、自宅から直接事業所へ出勤する。
- ③出勤、退勤時間、勤務時間、仕事内容、身なり（服装）については、事業所の担当者との打ち合わせによって、調整するものとする。
- ④出欠の確認は、事業所と生徒指導担当（又は学級担任・不登校学習支援員）の連絡によって行うものとする。
- ⑤P l a n体験に出席した場合は、学校においても出席扱いとする。
- ⑥基本的に、職員（本校）は付き添わないこととする。
*但し、P l a n期間中は毎日、学校側から事業所へ出向き、担当者へのあいさつ、生徒への激励を行う。
- ⑦対象生徒は、名札着用の上、事業所にふさわしい服装で参加する。

(8)実践上の留意点

- ①事業所への迷惑を最低限に抑えられるよう事前学習をしっかりと行う。また、事業所選定に当たっては、生徒の興味・関心のもてる事業所を可能な限り選定する。
- ②保護者にP l a nの趣旨を十分に理解してもらい、特に出勤時は時間におくれないよう協力を求める。
- ③P l a nの体験中は、事業所側の指導に素直に従い、自分勝手な行動（問題行動）をとることがないようにその指導を徹底する。
- ④事業所への往復やP l a n体験中の安全に配慮し、事前の安全指導を徹底する。

(9) P l a n実施までの流れ

図7 「J-T-Plan実施までの計画」



A期 ①対象生徒申込〆切り 11月8日・月
②調整会議 11月9日・火 ⑦事業所訪問・面接 11月12日・金

B期 ①対象生徒申込〆切り 11月29日・月
②調整会議 11月30日・火 ⑦事業所訪問・面接 12月3日・金

(10)実践計画及び内容

月 日	曜	実 践 内 容	場 所 ・ そ の 他
10.12	火	○ J C I への協力依頼 (J C I 理事長への協力依頼)	J C I 事務局
10.19	火	○ 「 J T - P l a n 」 の内容確認 ○ J C I 定例会への参加 (参加 委員会SSW・平良中学生指導主任・本研究教員) ・「あそび・非行」の不登校の現状説明 【下 写真7】 ・「 J T - P l a n 」 への協力依頼 (協力事業所要請)	J C I 事務局 委員会 J C I 事務局
10.27	水	○ 「 J T - P l a n 」 の内容について最終確認 (参加 委員会SSW・平良中学生指導主任・久松中学生指導主任・本研究教員)	J C I 事務局
10.29	金	○ 北中学校「生徒指導委員会」への参加 ・「 J T - P l a n 」 についての説明	北中学校
11.11	木	○ 「 J T - P l a n 」 協力事業所確認・意見交換	J C I 事務所
11.16	火	○ 「 J T - P l a n 」 A 期実践スタート (挑戦生徒3名) ・「いずみ」「丸西」「あずき屋」での挑戦	各事業所
11.18	木	○ 「 J T - P l a n 」 事業所協力依頼 【下 写真8】	各事業所
12.1	水	○ 「 J T - P l a n 」 B 期①実践スタート (挑戦生徒3名) ・「第3宮古給油所」「ロータス東和オート」「ROOT」	各事業所
12.7	金	○ 「 J T - P l a n 」 B 期②実践スタート (挑戦生徒6名) ・「協進開発」「第1宮古給油所」「大和電工」「光宮古商事」 「OKモーターズ」「第3宮古給油所」	各事業所
12.17	金	○ 学習支援についての検討会 ・「 J T - P l a n 」 挑戦生徒への学習支援検討	宮古島署
12.20	月	○ 「 J T - P l a n 」 事後評価依頼	各事業所
12.22	水	○ 「 J T - P l a n 」 事後評価回収	各事業所
1.6	木	○ 学習支援についての最終調整、意見交換 ・学習支援要員の紹介と意見交換	久松中・花福
1.11	火	○ 「 J T - P l a n 」 C 期実践スタート ・ B 期挑戦生徒 (3名) 継続挑戦 「OKモーターズ」「第3宮古給油所」「光宮古商事」	各事業所
1.12	水	○ 「 J T - P l a n 」 「学習支援」における意見交換	久松中
1.13	木	○ 「 J T - P l a n 」 の事後評価依頼 (学校用・保護者用)	平良中・久松中
1.14	金	○ 「 J T - P l a n 」 の事後評価依頼 (学校用・保護者用)	北中
1.21	金	○ 「 J T - P l a n 」 の事後評価回収 (学校用・保護者用)	平良・北・久松

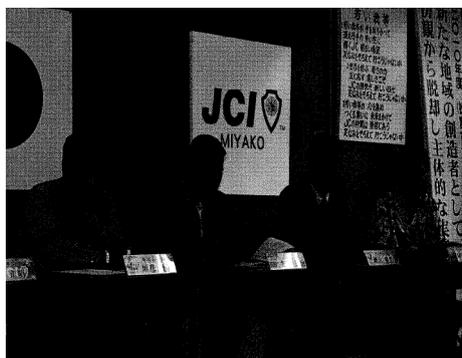


写真7「JCI定例会への参加」(JCI 事務所 H22.10.19)



写真8「JT-Planへの協力依頼」(各事業所 H22.11.18)

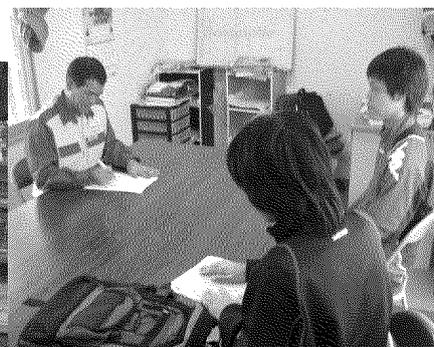


写真9「JT-Plan 挑戦生徒の面接」(各事業所 H22.12.1)

2 検証実践における実践例

<p style="text-align: center;">研究仮説</p> <p>「出番（居場所）」を与えて「役割（仕事）」を果たさせ、その行動を「承認（ほめる・認める）」することによって、生徒自ら責任感や自信をもち自立に向けての成長を促進することができるであろう。</p> <p>* 「自分のやりたいことは何か」「やらなければならないことは何か」「気づき」を重点として。</p>	<p style="text-align: center;">検証の視点① 「自己肯定感」</p> <p>「役割」を果たし「承認」されることで自らに自信をもちはじめているか。</p> <p style="text-align: center;">検証の視点② 「将来への希望」</p> <p>自らの課題に気づき自分を伸ばしていくための糸口を見つけ、将来に希望をもつことができているか。</p>
---	--

(1) 「JT-Plan」の実践より

「実践例1」

A中学校 2年女子	④挑戦事業所「フラワーショップ いずみ」
<p>①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→無気力」</p> <p>②不登校等の状況</p> <p>人との関わりが苦手で1年時から欠席が多い。登校した日は校内の支援教室で補習を受けるが欠席が多い状況が続いている。</p> <p>③挑戦期間及び挑戦日数・時間</p> <p>11/17～11/18（挑戦日数2日）午前中（4,5h）</p>	 <p style="text-align: right;">写真10 「Plan挑戦」</p>

4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない)

表 C-1

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	3	2	2
②「時間」を守ることができる	時間	3	2	2	2
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	2	2	3	3
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	4	3	2	2
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	4	3	2	2
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	2	/	/
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	1	1	/	/
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	3	3	2	2

挑戦前(本人目標)

「JT-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。

一生懸命がんばる。

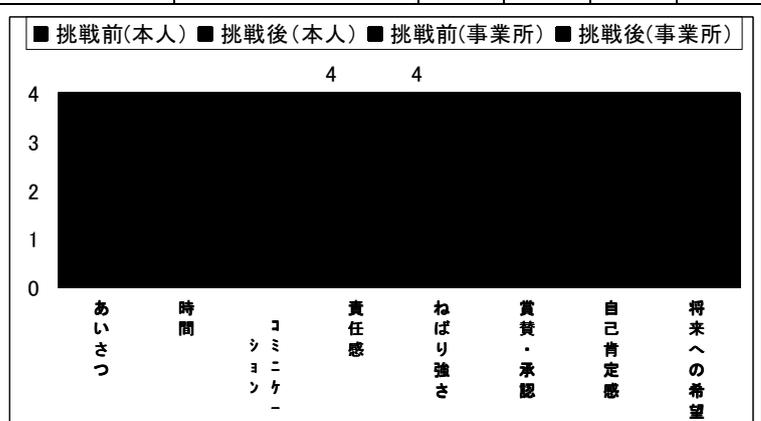
挑戦後(本人感想・今後の目標)

「JT-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。

JT-Planを終えて、正直、個人的にはとても楽しかった。花屋さんの人に言われた通り色々な事に感謝するようになったと思える。

また自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について)

私は将来の夢に向かって頑張っているけど朝よく寝過ぎてしまうため、学校に行かないが増えました。でも無理して学校に行きたいです。



研究仮説の検証(検証の視点①②から)

図 C-1

挑戦日数が2日と少なかったため、自らについて「気づき」を得るまでには至っていない。事業所の方とは、コミュニケーションもとれていたようで自分からいろんな話しをすることも多かったようである。

「実践例2」

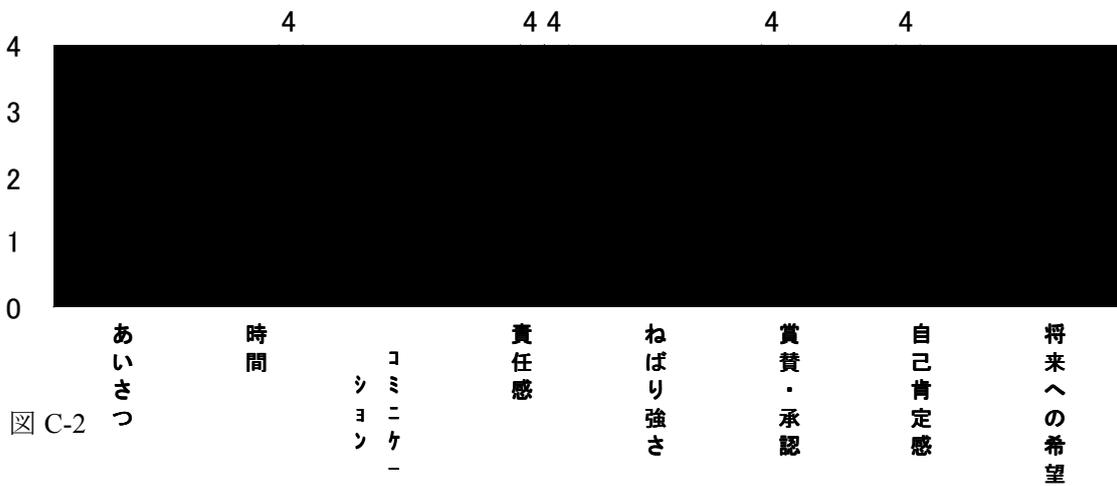
A中学校 3年女子	④挑戦事業所「ヘアサロン ROOT」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題-無気力」 ②不登校等の状況 2年時より欠席が多く、3年になっても欠席が続く。学力が低調気味であるためか進路についても真剣に考える様子がみられない。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/3～12/22（挑戦日数5日） 午前中3h	 <p style="text-align: right;">写真11 「Plan」挑戦</p>



4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表C-2

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	2	2	3
②「時間」を守ることができる	時間	2	2	3	4
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	3	2	1	2
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	3	2	4	4
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	3	2	2	2
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	4		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	1	4		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	2	3	2	2

■ 挑戦前(本人) ■ 挑戦後(本人) ■ 挑戦前(事業所) ■ 挑戦後(事業所)



挑戦前(本人目標) 「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 やる気には時間があったら頑張りたい がんばってみたいと思ってる	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 楽しかった あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) 学校行く方にして思っ出をいっしょ作る
---	---

研究仮説の検証(検証の視点①②から)

途中、何度か欠席があったが、事業所内での仕事にはしっかりと責任を果たし自信を持ち始めている。学校を欠席することについて負い目を感じるようになっており(学級担任)自らの将来について考えている様子がある。(保護者)

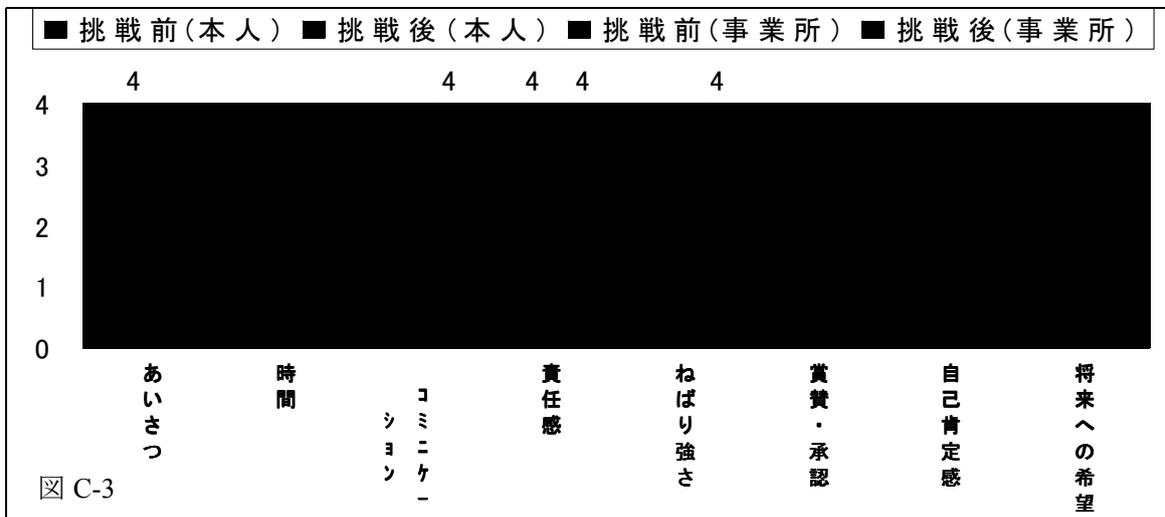
「実践例3」

A中学校 3年男子	④挑戦事業所「宮古給油所(第3)」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→無気力」 ②不登校等の状況 2年時より欠席が多いため、3年に進級してから「市相談室」に入室する。基本的な生活習慣が確立されていないため、Plan挑戦を通して改善を促したい。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 11/30～12/22(挑戦日数8日) 午前中3h *1月以降も継続挑戦	 <p style="text-align: right;">写真12 「Plan挑戦」</p>



4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表C-3

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	4	2	3
②「時間」を守ることができる	時間	2	3	2	2
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	2	3	2	4
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	3	4	2	4
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	2	3	2	4
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	3		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	2	3		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	2	3	1	1



挑戦前(本人目標) 研究仮説の検証 「J-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 つらいときでもきついときでもできる がんばりがえること。	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「J-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 つらい(きつい)あいやつがてまなかにた びてきえるようになったのでおかげで あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) 物にぶつかる所うにがんばる。
--	--

(検証の視点①②から)

挑戦を通して自らに自信を持ち始めている。また、危険物の資格試験に合格できたこともあって将来はガソリンスタントへ就職したいという具体的な目標を持ち始めている。(学級担任) 家庭でも以前に比べると朝、早く起きるようになってきている。(保護者) 自分がやらなければならないことは何か。「気づき」の中で成長している様子が伺える。

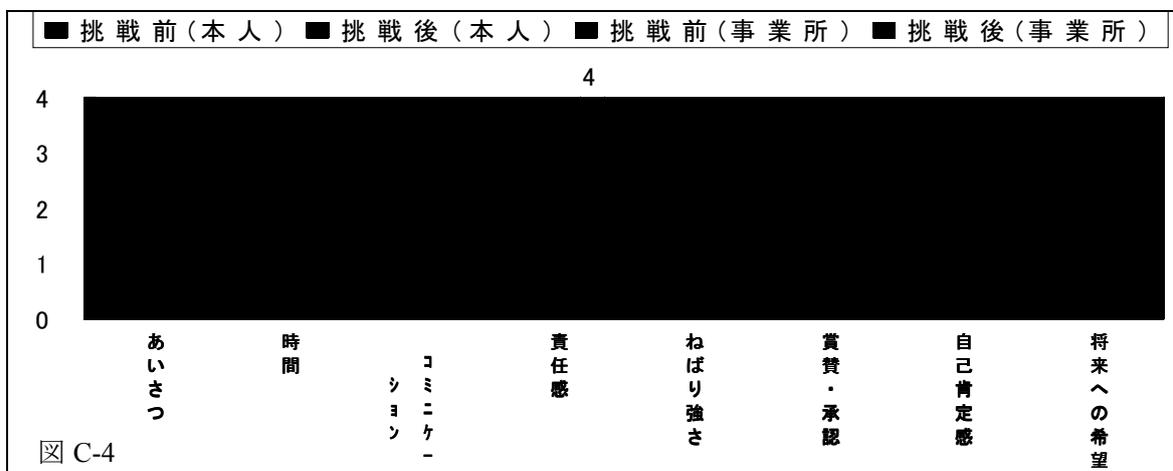
「実践例4」

A中学校 3年男子	④挑戦事業所「ロータス東和オート」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→あそび・非行」 ②不登校等の状況 1年時より欠席が多く喫煙、深夜徘徊等の非行を繰り返している。高校への進学を希望しているが、時差登校が多いため授業に参加することも少なくなっている。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/2～12/21（挑戦日数4日） 午前中3h	 <p style="text-align: right;">写真13 「Plan挑戦」</p>



4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表C-4

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	1	1	1	2
②「時間」を守ることができる	時間	1	1	1	1
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	2	2	1	3
④何かにかんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	2	2	1	4
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	2	2	1	2
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	2		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	2	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	2	2	1	3



挑戦前(本人目標) 「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 さほらないてかんばる	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 楽しかった。 あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) かんばる
---	--

研究仮説の検証(検証の視点①②から)

欠席や時差登校が多いため挑戦中も遅刻や欠席が多くなってしまったが、事業所内ではしだいにコミュニケーションも取れるようになり、与えられた仕事に責任を果たしていた。(事業所主)。挑戦中は、充実した日が過ごせたのか表情がいつもと違っていった。(保護者)学校生活においては、自信の高まりや自らの「やらなければならないこと」等への気づきは、挑戦後の行動には見られないようだが、今後に期待したい。

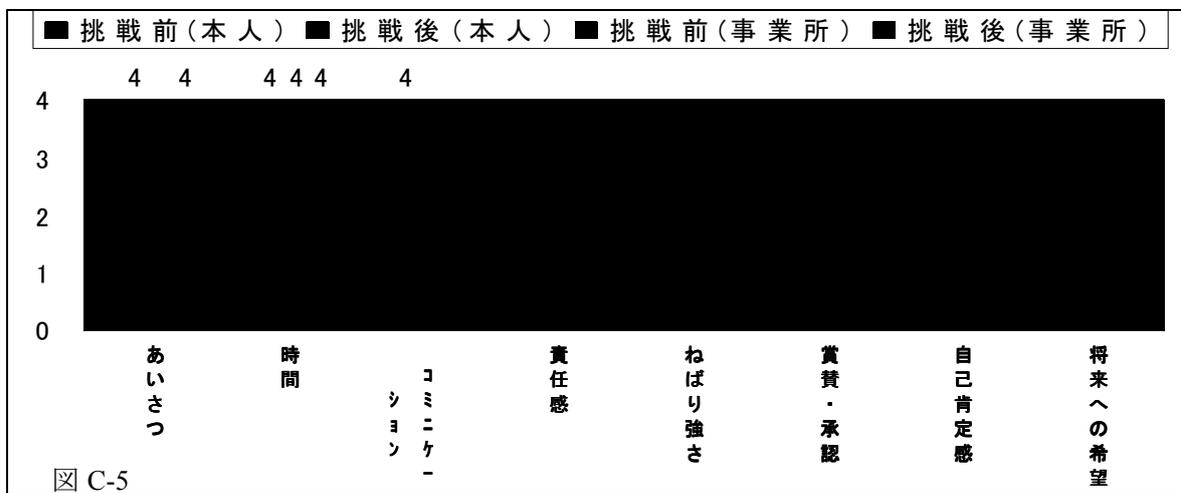
「実践例5」

A中学校 3年男子	④挑戦事業所「大和電気（やまと商事）」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→あそび・非行」 ②不登校等の状況 2年時より欠席や時差登校が多くなり深夜徘徊等の非行も目立つようになる。3年になってからも時差登校が多く問題行動で指導されることが多い。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/8～12/22（挑戦日数6日） 午前中4h	写真14 「Plan」挑戦



4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表 C-5

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	2	4	3	4
②「時間」を守ることができる	時間	2	4	4	4
③おとなの人とふつうに話ができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	3	4	3	3
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	3	3	3	3
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	2	3	2	3
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	3		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	2	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	1	2	1	2



<p>挑戦前 (本人目標)</p> <p>「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。</p> <p>時間と早起朝早くしないように頑張る。</p>	<p>挑戦後 (本人感想・今後の目標)</p> <p>「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。</p> <p>きっかけとしていいきっかけをしたのでよかった。また、お礼がよかったです。</p> <p>あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について)</p> <p>よりお礼が早くしたい。学校にも頑張りたい。</p>
---	---

研究仮説の検証（検証の視点①②から）

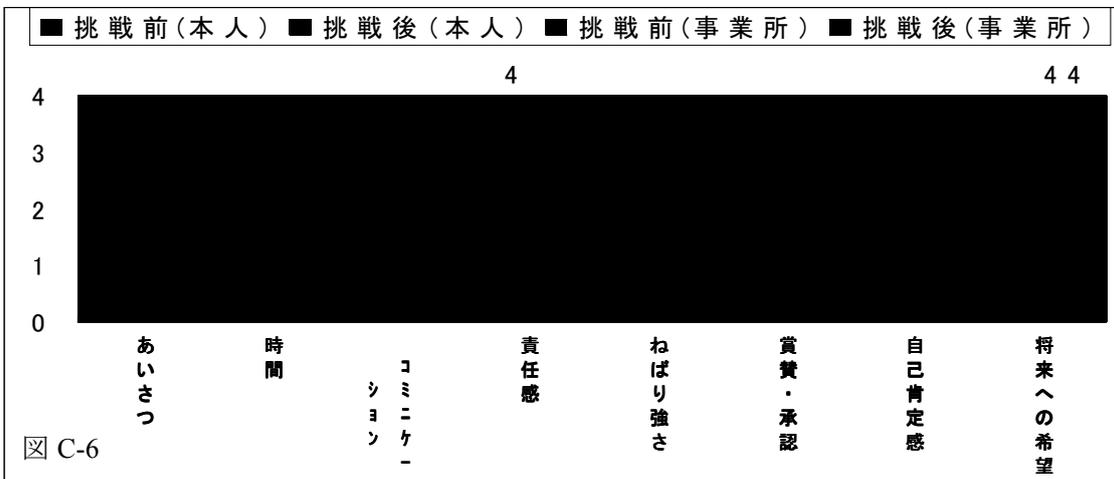
挑戦中は、1日熱発で欠席しただけで真面目に出席、あいさつ等もしっかりとでき笑顔もあって楽しそうに見えた。（事業所）また、期間中は朝もしっかりと起き表情も良かった。（学級担任） 本人にとって挑戦そのものが有意義で、ほめられる（承認・賞賛）ことで意欲の高まりも見られたが、挑戦終了後に元に戻ってしまった。（学級担任）

「実践例6」

B中学校 3年女子	④挑戦事業所「光宮古商事(info bar)」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→あそび・非行」 ②不登校等の状況 2年後半から欠席（非行）が多くなる。3年に進級した当初は登校するようになっていたが、5月頃から再び、欠席が多くなっている。PC等の活用に興味をもっている。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/7～12/22（挑戦日数6日） 4, 5h程度 *1月以降も継続挑戦	 <p style="text-align: right;">写真15 「Plan」挑戦</p>

4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表 C-6

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	3	2	3
②「時間」を守ることができる	時間	1	3	1	1
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	2	3	3	3
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	1	4	2	2
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	1	1	2	2
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	1	2		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	2	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	2	3	4	4

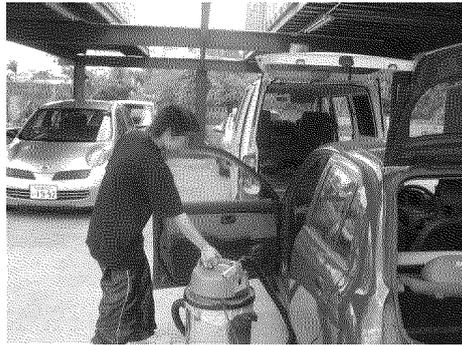


挑戦前(本人目標)	挑戦後(本人感想・今後の目標)
「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 通常登校 / 仕事: 2KFC行きたい(資格も)	「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 周りの人がすごく優しくしてくれたので、とてもおもしろかったです。 自分のことで自己紹介したので、お友達に話さずにはいられなかった。 あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) 1年あったJ-T-Planは、1年間働いて良かったと思うので、来年も頑張りたい。 お友達と一緒に卒業したい。

研究仮説の検証(検証の視点①②から)

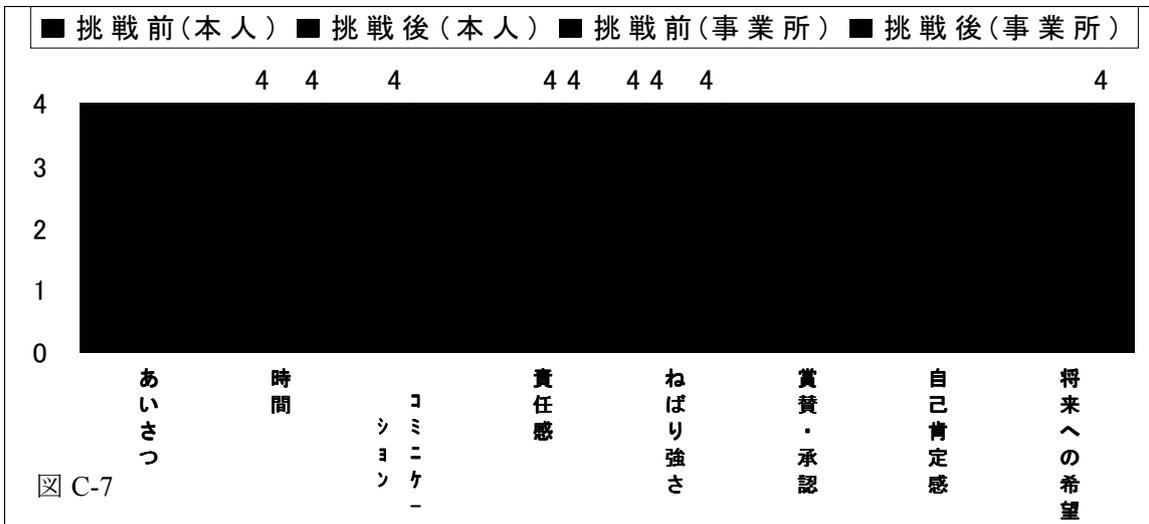
体験当初は、事業所内での人との関わり、仕事への姿勢等で戸惑いや消極的な面も見られたが、少しずつ会話もできるようになっている。(事業所主) 本人の内面においては、役割を果たし認めてもらうことで、少しずつではあるが自分への気づきがあり、学校生活や進路においてもさらに具体的な考えを持ち始めている。行動に移せるようなはたらきかけが必要。

「実践例7」

B中学校 3年男子	④挑戦事業所「OKモータース」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→あそび・非行」 ②不登校等の状況 2年時より授業をエスケープするようになり、3年に進級した5月からは無断欠席や欠課(エスケープ)がさらに多くなった。他校生徒との交友が多く問題行動もある。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/7～12/22(挑戦日数11日) 午前中4h *1月以降も継続挑戦	 <p style="text-align: right;">写真16 「Plan」挑戦</p>

4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表C-7

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	3	2	3
②「時間」を守ることができる	時間	2	4	3	4
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	3	4	3	3
④何かにがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	3	3	4	4
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	4	4	3	4
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	2		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	1	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	1	3	3	4



挑戦前(本人目標) 「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 職場において、自分のやりたい事を見つける	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 ・まっかときもあたけと楽しかった。 ・自分でも長続きするとは思わなかった。 あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) 高校に行くこと
---	---

研究仮説の検証(検証の視点①②から) 高校に行くこと

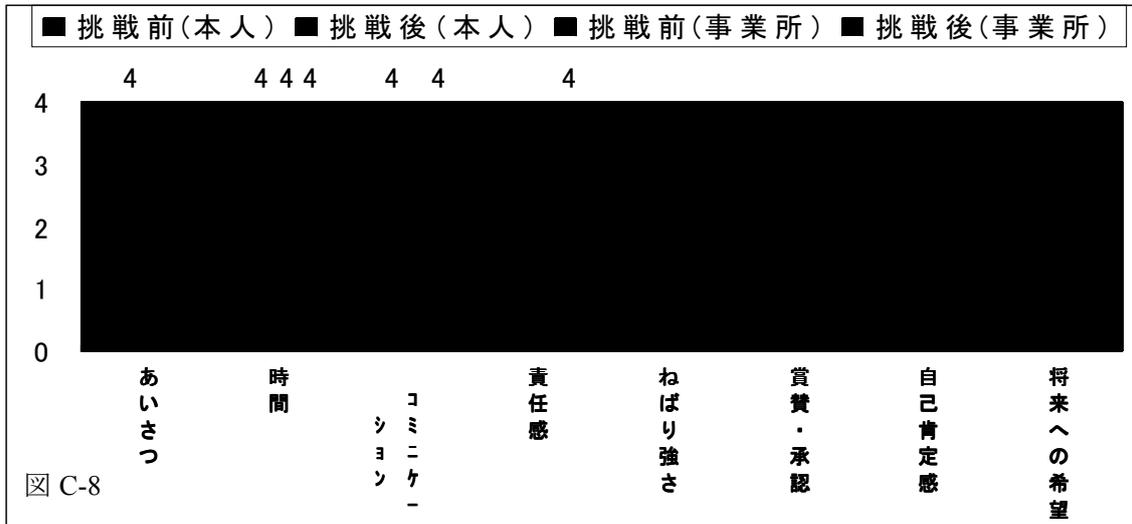
挑戦前の「やりたいことを見つける」から、挑戦後は「自分でも長続きするとは思わなかった」そして目標は「高校に行くこと」としている。事業所内で役割を果たすことで自信を持ち始め、進路に対しても目標を掲げて前向きになっている。学校生活においても当番活動への取り組みや学習に対する意欲等、多方面で変容が見られ始めている。(学級担任)

「実践例 8」

C中学校 2年男子	④挑戦事業所 「宮古給油所 (第3)」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→無気力」 ②不登校等の状況 1年時(5月)から友人関係がうまくいかず不登校となる。小学校の頃も同様に人とのコミュニケーションをとることが苦手である。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/14～12/22(挑戦日数5日) 午前中3h	写真17 「Plan」挑戦

4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表 C-8

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	3	2	3
②「時間」を守ることができる	時間	2	4	3	4
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	3	4	3	3
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	3	3	4	4
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	4	4	3	4
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	2		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	1	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	1	3	3	4



挑戦前(本人目標) 「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 危険物取扱者試験 合格おと	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 必ずかたいところもあつたりとやうくたのしかった。 あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) 危険物取り扱いのことも
--	---

研究仮説の検証(検証の視点①②から)

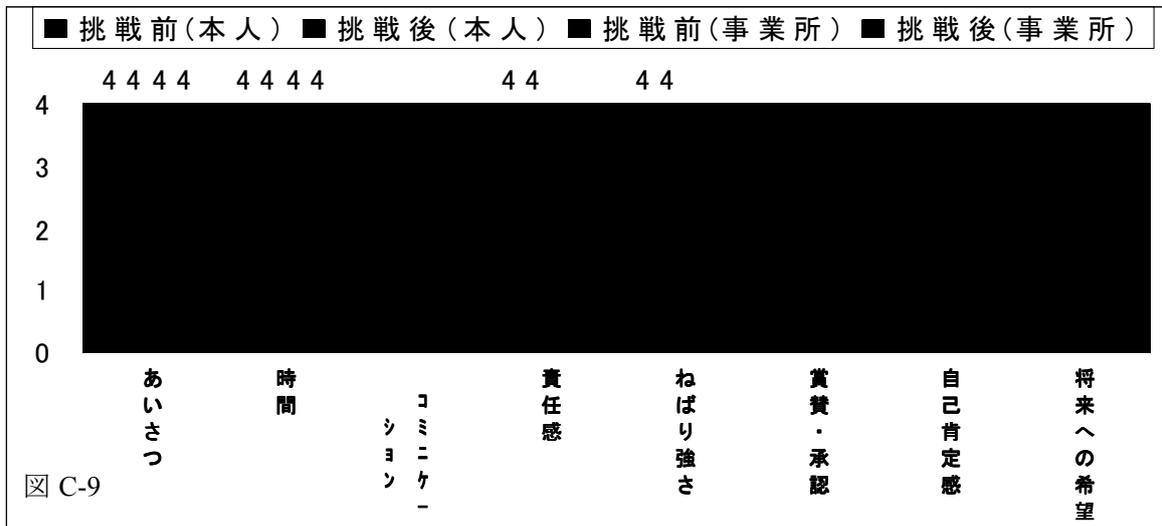
挑戦中は、時間を気にするようになり機敏に行動するようになっていた。また、挑戦後は将来の仕事の話などもしてくれた。(保護者) 挑戦を通して自信の深まりや将来への希望を持ち始めていることがわかる。通室中の市相談室での「危険物の資格試験」に合格できたこともあって前向きになる様子がうかがえた。自主性やねばり強さを育てること。また、次の目標設定が大事である。(学級担任)

「実践例9」

C中学校 3年女子	④挑戦事業所 「あずき屋」
①不登校のきっかけ・継続理由「友人関係→不安など情緒的混乱」 ②不登校等の状況 2年時の9月頃から友人関係のトラブルがきっかけで不登校となる。「人に会うのが怖い」といっており、対人関係に自信をつけさせたい。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 11/22～11/26（挑戦日数5日）9:00～16:00	 <p style="text-align: right;">写真18 Plan挑戦</p>

4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表C-9

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	4	4	4	4
②「時間」を守ることができる	時間	4	4	4	4
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	2	2	2	3
④何かにがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	4	4	3	3
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	4	4	3	3
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	2	3		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	2	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	3	2	3	3



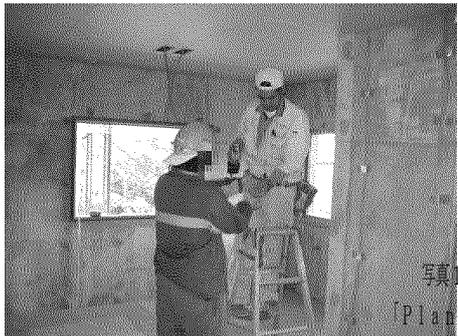
挑戦前(本人目標) 「J-T-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 仕事をいしても覚えるように頑張る	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「J-T-Plan」への挑戦を終えての感想を書いてください。 とても楽しかったです。もっとよかったです。自分。 あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について)
---	--

研究仮説の検証(検証の視点①②から) 先強をがんばる!!

Plan挑戦中は、事業所内での役割に責任を果たし「勉強をがんばる」という目標を設定することもできた。挑戦後は久しぶりに登校、3学期からは職員室で学習することも増えており高校へ進学したいと話してきた。(学級担任)

自らに対し自信をもつまでには至っていない(ガチ・記龍感)が、登校し学習への取り組みを継続させることで自信につながっていくと思われる。

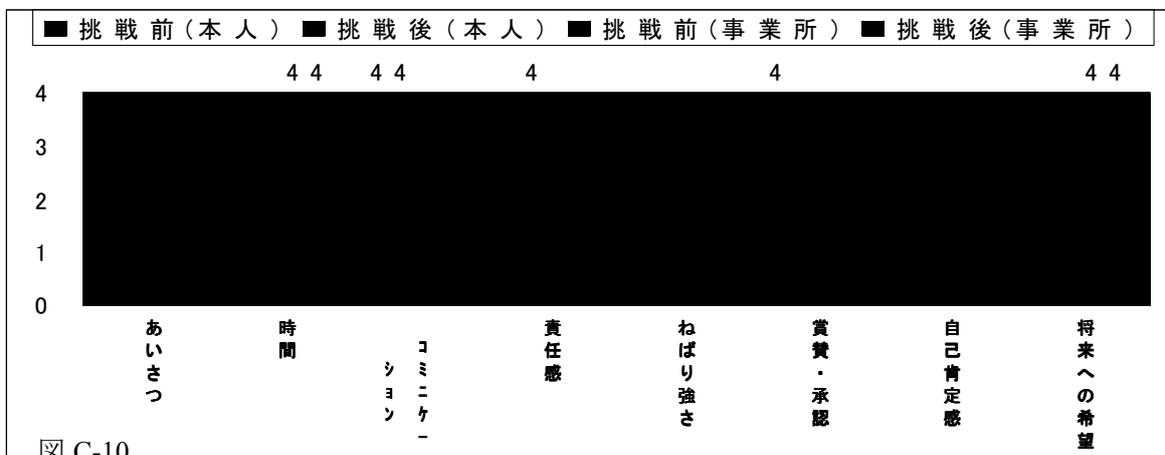
「実践例10」

C中学校 3年男子	④挑戦事業所 「協進開発」
①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→あそび・非行/無気力」 ②不登校等の状況 2年時の9月に転入してきた。断続的な欠席はあるものの登校する日が多かった。 3年に進級してからは、無気力な状態でほとんど登校しなくなり、問題行動も増えてきている。 ③挑戦期間及び挑戦日数・時間 12/10～12/14（挑戦日数3日）9:00～16:00 *12月の挑戦は途中で終わったが、1月から再開している。	 <p style="text-align: right;">写真19 「JT-Plan」挑戦</p>



4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表 C-10

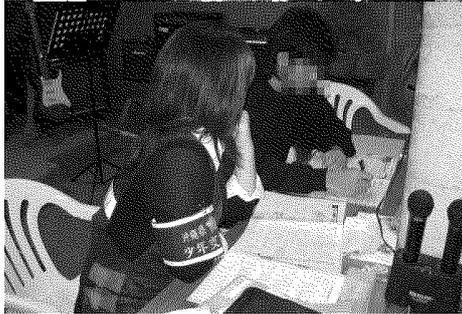
質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		前・初期	後・終期	前・初期	後・終期
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	3	3	2	2
②「時間」を守ることができる	時間	2	2	4	4
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会話・返事)	コミュニケーション	4	4	3	3
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	3	4	3	3
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	3	2	2	2
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	4	3		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	3	3		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	2	3	4	4



挑戦前(本人目標) 「JT-Plan」に向けてのあなたの目標を書いてください。 今起きている時間がおそろい。JT-Planで時間をしっかり守る。	挑戦後(本人感想・今後の目標) 「JT-Plan」への挑戦を経た後の感想を書いてください。 大抵は長く続けたいと思ってるけど毎日来たら職場の事でもしたくなれる良いです。あなた自身の今後の目標を書いてください。(学校生活・進路について) できるだけ休まないようにして、勉強は自分なりに少しづつやっていけるように頑張りたいです。
--	---

研究仮説の検証(検証の視点①②から)
 Planに挑戦する中で時間のけじめが身につく、与えられた役割も誠実に責任を果たすことができた。12月の挑戦においては、登校状況の改善等、行動面での変容は見られなかった(学級担任)が、1月になってPlanに再挑戦し事業所での学習支援も受けるようになってきている。気づきを得、葛藤する中で後戻りすることもあるが、進路について考える様子もあり少しずつ成長してきている。(学級担任)

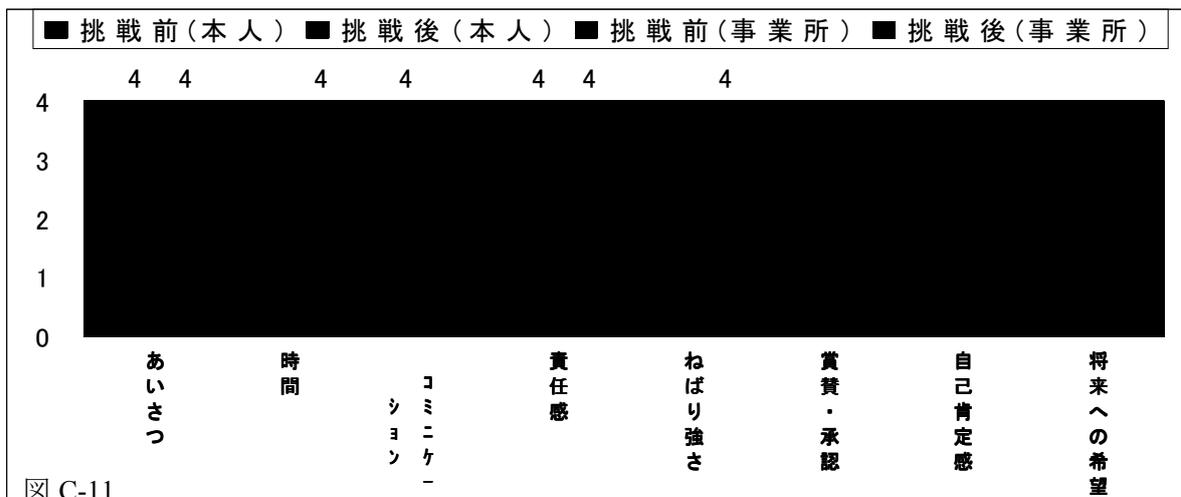
「実践例 11」

A中学校 過卒生徒	④挑戦事業所 「花福」
<p>①不登校のきっかけ・継続理由「本人に関わる問題→あそび・非行」</p> <p>②在学時（不登校）から現在までの状況 昨年度過卒生で、在学中2年時から非行や欠席、時差登校が続いていた。3年時に実施した約2週間の就労体験（H21.12月）を「花福（研真）」にて挑戦、前向きになる様子も伺えたが、高校へ進学できず浪人。 約半年後、塾での授業料稼ぎのため、自主的に再び同店へ戻りアルバイトをしながら受験勉強に取り組んでいる。</p> <p>③学習支援の様子（H23.1.12～ 週2回） 少年支援要員（古島警察署）による学習支援を同店舗の地下で1月からスタート。高校進学に向けて学習に励んでいる。週2回（水・金）1時間の学習支援だが熱心に取り組んでいる。 ＊右写真 上「花福店舗にて」 下「学習支援のようす」 ➡</p>	 <p>写真20-1 「花福にて」</p>  <p>写真20-2 「学習支援」</p>



4:よくあてはまる(よくできる) 3:少しあてはまる(できる) 2:あまりあてはまらない(あまりできない) 1:全くあてはまらない(全くできない) 表 C-11

質問項目	グラフ項目	本人自己評価		事業所評価	
		1年前	現在	1年前	現在
①「あいさつ」はきちんとできる	あいさつ	1	4	2	4
②「時間」を守ることができる	時間	1	3	2	4
③おとなの人とふつうに話しができる(事業所内会議・返事)	コミュニケーション	3	4	1	3
④何かがんばることができる(事業所での仕事への責任)	責任感	1	4	2	4
⑤つらい(きつい)時、がまんすることができる	ねばり強さ	1	3	3	4
⑥ほめられることがよくある	賞賛・承認	1	3		
⑦自分に自信がもてる	自己肯定感	1	2		
⑧自分の将来(進路)に希望がもてる	将来への希望	1	3	1	3



研究仮説の検証（検証の視点①②から）

1年前に比べ、笑顔が増え、少しずつではあるが会話（質問）もするようになってきている。また、与えられた役割（仕事）に対して考えて行動するようになっており、何よりも現在の自らの状況を理解し、道が開けるよう前向きになっている様子が感じとれる。（事業主）

(2) 「JT-Plan」と「学習支援」の並行実践より

青少年の非行防止対策の一環として宮古島署に新たに委嘱される「少年支援要員」の活用について検討。「学習支援」を積極的に実施したいという警察からの意向により、学校、事業所（JCI）、警察の三者で「少年支援要員」の「学習支援」について方法、内容を検討し、1月の第2週目から実施することになった。

～「学習支援」についてのプランニング～

- 原則として「JT-Plan」と並行して行う。
- 「JT-Plan」を午前中に行い、「学習支援」は、午後から行う。
- 週1～2回（1時間程度）からスタートする。
- 各学校、「あそび・非行」の傾向のある生徒の中から学習に対して意欲のある（あるいは、意欲の出始めた）生徒を対象とする。



写真21 「学習支援についての検討会」(宮古島署 H 22.12.17)

① 「JT-Plan」と「学習支援」の並行実践

「実践例7」

B中学校 3年男子

JT-Plan事業所「OKモータース」・学習支援「校内」



写真22 「学習支援について調整会議」(B中学校 H23.1.6)



写真23 「JT-planの後の学習支援のようす」(B中学校 H23.1.13)

研究仮説の検証（検証の視点①②から）

12月のPlan挑戦後、「高校へ行きたい」と進路に対して前向きになり、学校生活においても「良くなりたい」「変わりたい」という様子が見られる。本人への支援体制をさらに拡充し、1月からは、午前中「JT-Plan」、午後からは宮古島署の少年支援要員から学習支援（週2回）を受けている。本人がさらに自信を深め、高校進学、そしてその先の将来における自己実現に向かって努力し続けることを期待したい。

「実践例11」学習支援についての調整会議

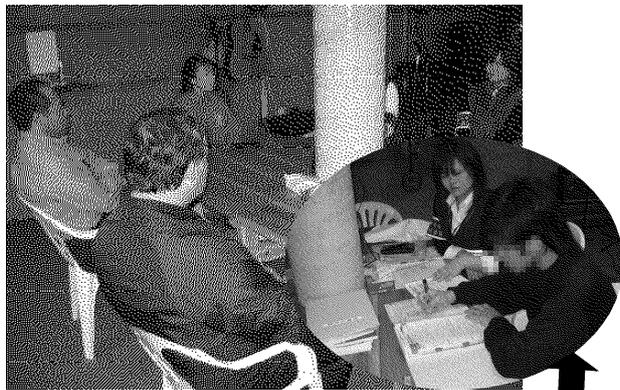


写真24 「調整会議」(花福 H23.1.6)

学習支援のようす

「実践例5」学習支援のようす



写真25 「学習支援」(本校 H23.2.2)

○生徒の感想においては、「あいつができるようになった。」「きつかったけどいい経験をした。」「自分でも長持ちするとは思わなかった。」等、挑戦の中で役割を果たし、確実に自信を持ち始めていることが分かる。

また、「朝、起きれるようにがんばる。」「ちゃんと学校へ来る(行く)」「高校へ行く」等、具体的な目標を掲げ、歩み始めようとする意識の高まりを察することができる。

さらに、挑戦前後に実施した「自己評価」では、仮説に係わる「自己肯定感(図8)」や「将来への希望(図9)」に関する質問において、全体的には、「事前」よりも「事後」の自己評価数値が高くなっていることがわかる。

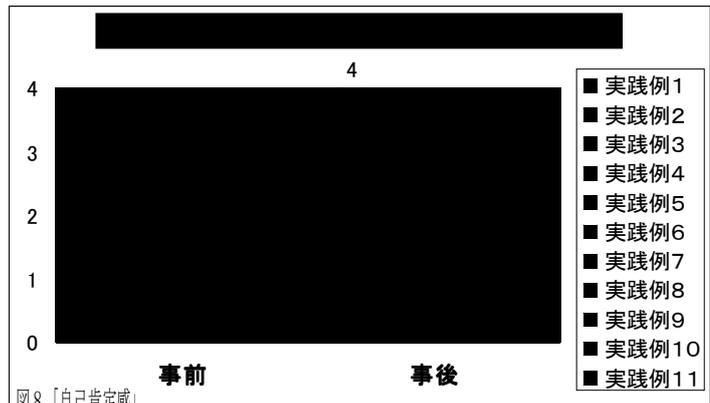


図8 「自己肯定感」

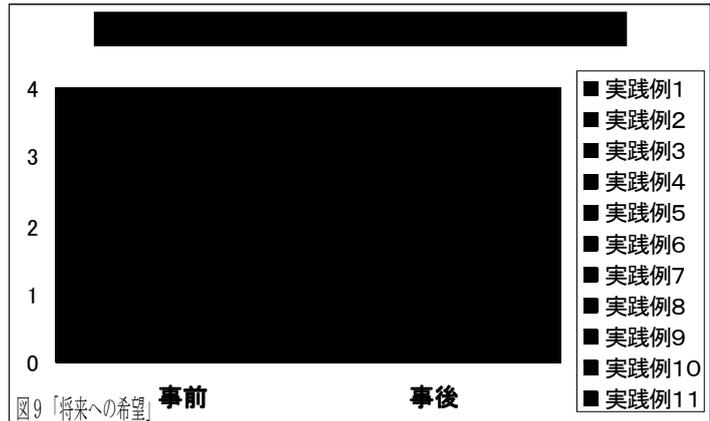


図9 「将来への希望」

②学校対象 事後アンケートからの検証

(「事後アンケート」(D)より 平成23年1月実施 対象：校長3人、生徒指導主任3人、学級担任9人 計15人)

質問：研究仮説は達成されたと思う。

	校長	生徒指導主任	学級担任	計
達成された	2	1	1	4 (26.5%)
ある程度達成された	0	2	5	7 (47%)
あまり達成されていない	1	0	3	4 (26.5%)
達成されていない	0	0	0	0 (0%)

*単位は人数

○「研究仮説」の達成状況について、「達成された」(15人中4人)、「ある程度達成された」(15人中7人)となっている。

「J T - P l a n」によって「役割」を果たす中で、自らに自信を持ち始め、自らの「やらなければならないこと」について、葛藤しながらもほぼ全員が「気づき」始めていることは明らかである。

しかしながら、自分を伸ばしていくための糸口に「気づき」ながらも、学校(家庭)生活の中で「気づき」から「行動」へと移行する段階に至ると、個人差が表れ、その差によって各教職員(校長・生徒指導主任・学級担任)の分析にも差異が出ている。

(4) 「J T - P l a n」事後評価

○学校（教職員）の声

〈 校長 〉

- ・「よい取り組みです。市教委の中に（学校教育課、総務課等）に担当職員（支援員等）を配置してもらえたらいいですね。不登校生徒を継続的に支援していくためにも、本研究の成果を継続していくためにも。」
- ・「学校と職場が一生懸命関わっているが、家庭（保護者）からの関わり方も重視した方がよい。家庭生活を改めない限り、その時はうまくいっても、終わった後はやはり元に戻ってしまうのではないか。」
- ・「自分でもやればできるという達成感を与えることで自信を持つ、瞳の輝きを取り戻すJ T - P l a nだと思います。今後も宮古島の中で“宮古の子は宮古の手で育てる”という思いで企業、サポートセンター等のご協力、支援、設立が必要だと感じています。J T - P l a nの継続活動をお願いします。」

〈 生徒指導主任 〉

- ・「とても可能性のある取り組みだと思う。教師以外の大人の関わりは、本人に何らかの変化が起こるきっかけになると考える。大いにチャレンジさせたい。たくさんの事業所開拓ありがとうございました。」
- ・「生徒本人の意志とモチベーションを上げることや生活リズムの乱れを改善することが課題である。対象生徒への事前指導を充分とることにより意欲をもたせることが必要である。学校、保護者、関係機関の事前会議などにより連携を深めることも必要ではないか。」
- ・「“生徒の変容が見えた”とてもすばらしい取り組みだと思う。事業所の方の協力に本当にお礼を言いたいです。」

〈 学級担任 〉

- ・「不登校生徒にとっては、いろいろな人との関わりを通して学ぶことが多いと思うので必要だと思う。社会性を養うためにも、ぜひ必要であると考えます。」
- ・「生徒たちの意識が変わるきっかけになるのでとても良いと思います。今後も続けてください。」
- ・「学校内だけでなく、他の仕事場や自分の興味のある職場の大人と関わることで生徒にとって良い刺激になったと思う。体験が終わって戻ってくると表情も良くいろいろなことを話してくれた。」
- ・「変わったとまではいかないが、“変わろうとしている生徒あり”とても良い取り組みだと思います。こちらも頑張れるムードをつくりたくなってくる。ただ、入試直前なのが痛い、もっと早ければ合格できる確率が上がってくるはず。」
- ・「学校や家庭とは異なった立場、社会からの声かけや接触を通して学び成長が著しいと考えられるので、とても良い取り組みだと思います。」
- ・「P l a nを通しての仮説の達成は今のところ判断が難しいが、意識面の変容は確実に見受けられる。」

○保護者の声

- ・「進路について考えるようになってきている」
- ・「挑戦をする前は、言われてから動く感じでしたが、体験中は時間などを気にし機敏に行動するようになり、体験後も将来の仕事の話などもしてとてもいい経験ができたと思います。」
- ・「とても良い計画だと思います。挑戦を通して意欲的になり、そして将来の職業を考えるきっかけになれば幸いです。」
- ・「前より、朝起きるようになりました。」
- ・「頭から学ぶ勉強とは違って、人との関わりを通して心から学べる勉強も必要です。人との会話やふれ合いが身近な環境から体験できればいいと思いました。」
- ・「家のことをよくするようになりました。」



○事業所の声

- ・「家庭、機関、事業所の三者間での協力をできるだけ気負うことなく、ある程度の情報交換を行えるようにしてほしい。」
- ・「学校や警察が嫌いになっているようです。お互い協力して積極的に関わることから始めたい。」
- ・「期間が短い、長いということではなく、3ヶ月に1度とか、半年に1度というように継続性をもって会う機会を増やすことで、その後の経過や話しをすることができるかと。もちろん本人の意志確認をとって。」
- ・「実習期間中、本人が変わって家に帰っても親の方が少しでも変わらない限り意味がないかと思えます。(保護者からの感謝の気持ちが見えない。) 毎日の日誌の中に事業所、学校、保護者の感想欄も入れてほしい。」
- ・「社会人の基礎でもあるコミュニケーション能力や探求心等を養えるように事前のカリキュラム作成が重要だと思います。」
- ・「あいさつ等はちゃんとできています。笑顔もあって楽しそうに見えました。」
- ・「興味があることを見いだすことが必要だと感じました。学校側、親、受入企業側の関係を少しずつでも強化していけたらと考えます。」
- ・「社会とのふれ合いや人との出会いによって、今、何を訴えたいのか話せるチャンスができると思います。あわてずにゆっくりと時間を掛けてたくさんの方と話しをした方が良くかと思えます。」

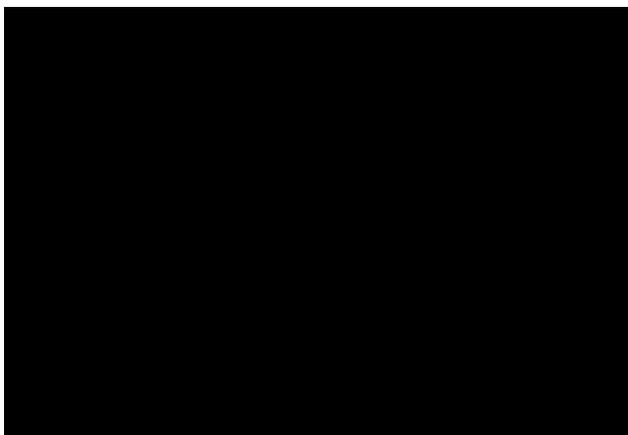


図 D-5 「学校・保護者・事業所評価」



めまあい		とてもい
まああい		とてもい
まああい		とてもい
■ よくない ■ あまりよくない ■ まあまあい ■ とてもい		

(5) 取り組みに関わって

「J t - P l a n の総括と展望」

J C I (宮古青年会議所) 理事長 中尾 忠彦 氏

今回は地域の代表として主に事業所の開拓を行いました、当初は、時間的な制約もあって事業所の開拓が思うように進まず、また、こちら側の意図が思うように伝わらずに（非行のある生徒や不登校生徒を受け入れることに）本P l a nに対して否定的な事業所もありました。

しかしながら、大半の事業所は、非常に前向きに係わって頂き、大変、感謝しております。



P l a nを進めていく中で、挑戦する子ども達が前向きになるためには、ある程度、興味のある仕事をさせてあげることが必要だと感じました。それを実現するためには、今後、登録事業所をさらに増やし子ども達一人ひとりの興味に沿った事業所の開拓を効率よく進めていけたらと考えています。

また、総じて子ども達の変った部分が「コミュニケーション能力」であると、各事業所からの評価を伺うことができました。これは社会人にとって最も重要な素質であり非常に良かったと感じています。P l a nの目指すところは「社会的自立」であり、今後も学校や家庭を基盤としてその素質を十分に磨いてほしいと考えます。

今回のP l a nの企画においては、私（J C I 中尾）と研究教員の狩俣先生、そして各中学校の生徒指導担当、市教育委員会の上地S S Wが係わりました。

今後は、J C Iとしても、内外においてさらに組織的な関わりを広げていきたいと考えていますし、行政、学校、家庭もさらに積極的に関わるようになれば、地域を挙げて子ども達のために動くことができると考えています。

最後になりますが、私たちJ C Iは2011年のキーワードとして「エコ」と「教育」を掲げています。「教育」においては、キャリア教育の視点を持ちながら「J T - P l a n」の推進に今後も協力して参る所存です。子ども達を育てながら、私たち大人もそれぞれの立場で大きく変わっていきましょう。

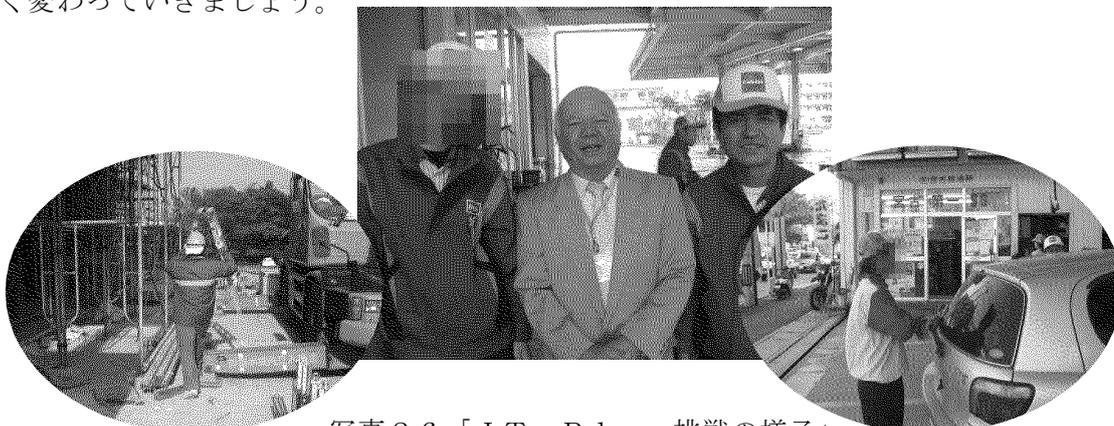


写真26 「J T - P l a n 挑戦の様子」

IX 研究の成果と課題

1 成果と課題

(1) 成果

- ①本研究の目標である地域の活用法を開拓するため、「開かれた生徒指導」の視点で、地域の大人社会に向けて、本校または本地区中学校の生徒指導の現状（「あそび・非行」の不登校傾向生徒の現状と問題点）について情報を提供し課題を共有することができた。
- ②前記①に関連して、生徒指導において「地域」の活用法が具体化されることが少なかったが、本研究によって「J C I（宮古青年会議所）」を地域の代表として活用し、地域、関係機関（警察等）を網羅した新たな支援体制（ネットワーク）を開拓することができた。
- ③対象となる生徒に、将来における「社会的な自立」を目指す糸口を与えるため、個に応じた支援策として「J T - P l a n」を立ち上げ推進することができた。
- ④「J T - P l a n」に挑戦し「役割」を果たし「承認」されることで、ほとんどの生徒が自らに自信を持ち始め、また、自らの「やらなければならないこと」について葛藤しながらも「気づき」を得ることができた。
- ⑤自らに自信を持ち始めることで、自らの「将来」に対し希望をもち「よりよく生きようとする」意欲の高まりが見られた。

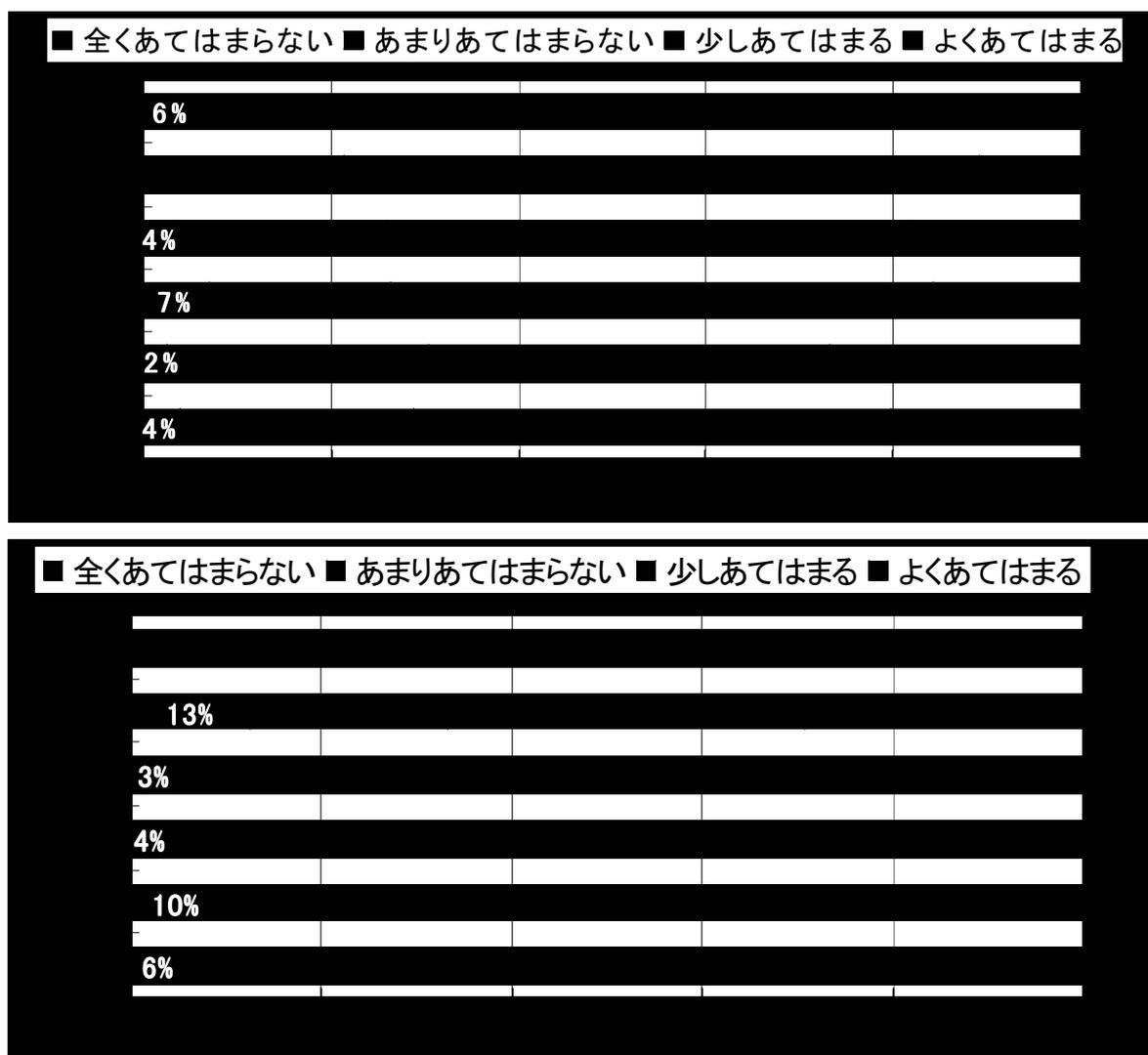
(2) 課題

- ①「J T - P l a n」を展開する中で、事業所と学校・家庭の連絡・調整の方法が具体化されずに継続されたケースが多かった。特に事業所と家庭（保護者）との関わり方について検討する必要がある。
- ②「J T - P l a n」に挑戦することで、自分を伸ばしていくための糸口に「気づき」ながらも、学校（家庭）生活の中で「気づき」から「行動」へと移行する段階に至ると、「行動」の表し方に個人差がある。そのため、P l a n挑戦後の事後指導（相談）が必要である。
(但し、その際、変容を過大に期待することがないように心がけたい。)
- ③前記①、②に関連して、事業所、学校、家庭がそれぞれの立場からP l a n挑戦中の本人の「気づき」や変容について共通理解を図る必要がある。特にP l a n挑戦直後に「ケース会議」等を持つことで本人に対する理解が深まり、家庭・学校においてフィードバックが図れるものと考えられる。
- ④「J T - P l a n」に挑戦したものの、1回のみ参加で終わってしまう生徒もいた。
P l a nに対する意欲の喚起と、できるだけ生徒の興味に沿った事業所を選定できるようにするため、更なる事業所の開拓を「J C I（宮古青年会議所）」と共に推進していく必要がある。

2 おわりに

本研究と並行して実施した教職員対象（宮古地区小中学校）のアンケート（次ページ図14）では、小学校、中学校共に7割以上の教職員がここ数年の生徒指導にやりづらさを感じている。本地区においても学区や学校規模によって多少の差異はあるものの、近年、全国的に問題視される生徒指導上の課題と同様に「児童生徒の規範意識の低下」「発達障害や低学力」「保護者との共通理解や連携」「不登校生徒への対応」等、多様な課題が挙げられている。

本研究においては、その多様な生徒指導上の課題の中から、中学校において特に大きな課題となっている「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援について取り上げ研究を進めてきました。



まず、先行研究や文献から「開発的生徒指導」等の理論を洗い出し、本県で「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援においては先端を行く那覇地区の自立支援教室「きら星学級」の経営方針や支援策についても調査を行ってきました。

その中で、「あそび・非行」の子ども達の「よりよく生きようとする力」を信じ、親身になって支援を行っている同教室職員の姿勢に深い感銘を受けると共に、変わることを求める前に「変わることのできる機会（きっかけ）」を与えることがいかに重要であるかを再認識することができました。

また、「開かれた生徒指導」の視点で地域（JCI）の大人社会と「あそび・非行」不登校傾向生徒の現状ついて課題を共有し、JCIや各事業所と共に「J T - P l a n」を企画、推進できたことは大きな成果となりました。

「“宮古の子は宮古の手で育てる。”」P l a nの「事後アンケート」に記載された中学校長の言葉ですが、家庭はもちろん、学校、行政、地域の大人が一体となつてこそ、子ども達へ「気づき」を与え成長を促すことができると考えます。

本地区における「あそび・非行」の不登校傾向生徒数は、今後、安心できる家庭環境とそれを支える地域社会が保障されない限り、年度によっては増加することも予測されます。また、学校における集団生活の秩序を保ち学習に適した環境を継続的に保障していくため、あるいは、前述した多様な課題に対応していくためには、生徒指導における校内体制の充実、そして行政、地域、関係機関が学校をしっかりと支える形で、有機的、組織的なネットワー

クを拡充し、具体的なP l a nを推進していくことが重要だと考えます。

その為には

- ①地域（関係機関）の活用法をさらに開拓し、具体的な取り組みを推進、継続していく「担い手」が必要であること。
- ②「あそび・非行」、「無気力」等、様々な不登校に対応する「支援室」を立ち上げ、学校、関係機関（警察等）そして「支援室」が協力しながら個に応じた「カリキュラム」を作成し、支援していくこと。

上記2点については、宮古地区小中学校の教職員を対象に実施した「アンケート」からも同様の意見が多数寄せられており、行政機関の取り組みが不可欠だと考えます。

最後になりますが、入所当初、学校現場とは違った静穏な環境とゆったりと流れる時間に戸惑いを覚え、何故か不安にさえなりました。しかしながら、那覇での調査研究を皮切りに、「生徒指導全般に関わるアンケート」等の実施や理論研究、そして「J T - P l a n」における実践研究と、日毎に加速していく充実した時を過ごすことができました。今後も、窓から見える「与那覇湾」の景色を時に思い起こしながら、研究心を忘れず「宮古の子ども達の教育」のため、思いを持って頑張っていきます。

〈主な参考文献・引用文献〉

- ・ 文部科学省 「中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－総則編－」 東京書籍 2004
- ・ 文部科学省「生徒指導提要」 文部科学省 2010
- ・ 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター
「生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導」 生徒指導研究センター 2009
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/1syu-kaitei/1syu-kaitei090330/1syu-kaitei.10korekara.pdf>
- ・ 坂本昇一「生徒指導の機能論の提唱」 学校図書 2001
- ・ 八並光俊・國分康孝「新生徒指導ガイド 開発・予防・解決的な教育モデルによる発達援助」 図書文化 2008
- ・ 倉本哲男「開発的生徒指導論と学校マネジメント」 ふくろう出版 2007
- ・ 静岡市教育センター「子ども理解に立った開発的生徒指導研究より」 静岡市教育センター 2008
<http://www.center.shizuoka.ednet.jp/page/kadai/kkiyou5.pdf>
- ・ 愛知県教育委員会「あそび・非行型不登校傾向生徒の支援プログラムより」 愛知県教育委員会 2010
<http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000030/30863/ziritusienpurogaiyou.pdf>
- ・ 諸富祥彦「7つの力を育てるキャリア教育」 図書文化社 2007
- ・ 佐賀市立金泉中学校 <http://www3.saga-ed.jp/school/edq10157/>
- ・ 那覇市教育委員会学校教育部総合青少年課自立支援教室きら星学級「教室経営プレゼンテーション」提供資料
- ・ 沖縄県教育庁宮古教育事務所 「宮古管内における不登校児児童生徒の実態」提供資料

